



JIC インフォメーション

第220号 2022 年 7 月 25 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

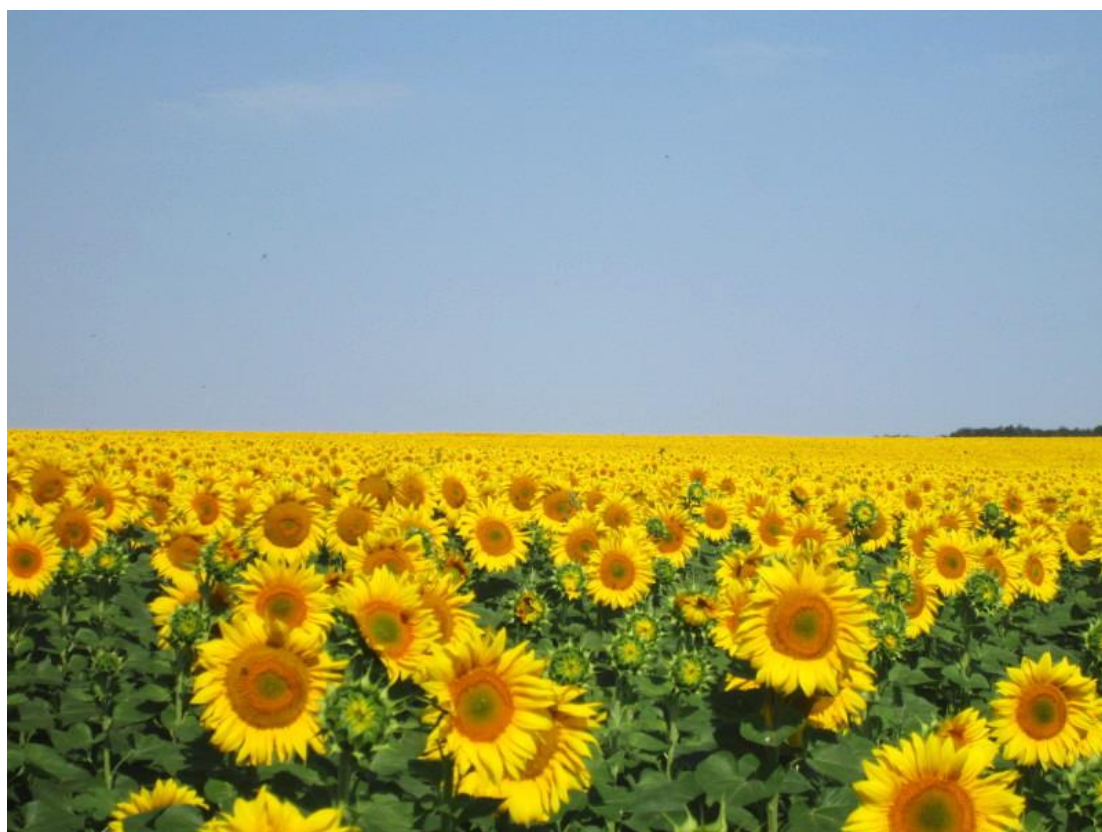
大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪府中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連
国際交流誌

ウクライナに平和を！



《特集・ウクライナ戦争》

国連事務総長宛公開書簡「停戦を仲介してください！」……3P

《講演録》 日ロクラブ例会

何がロシアを軍事侵攻に突き進ませたのか

……石郷岡 建（毎日新聞元モスクワ支局長）……4P

《講演録》 大阪大学「平和のための集中講義」

ウクライナ戦争をめぐる諸問題

……藤本 和貴夫（大阪日ロ協会理事長）……12P

《講演録》 大阪大学「平和のための集中講義」

対立の中で語られる「民族」と「言語」

……伊賀上 菜穂（中央大学教授）……17P

《ロシア関係情報》

ロシア料理レストラン「ペーチカ」……前田奉司……21P

《JIC イベント報告》

お菓子ルーレット～ vol.1 ゆるいお菓子の話……23P

「ロシアのチョコ包み紙」出版記念イベント……24P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

日ロ交流情報

日ロ友好愛知の会が講演会（6 月 19 日）

「銃ではなく、再び手に楽器を！」

日ロ友好愛知の会は、6 月 19 日にウクライナのチェルニヒウ・フィルハーモニー交響楽団で常任指揮者を務める高谷光信さん（日本ウクライナ音楽協会理事長、名古屋芸術大学非常勤講師）を講師に講演会を行いました。

高谷さんは大学卒業後、指揮の勉強のためにウクライナに留学。日本とウクライナを拠点に 20 年以上にわたって音楽活動を続けてきました。これまでの音楽活動やスラブ音楽への思い、ウクライナの音楽家たちの現状を分かりやすく講演。ロシア軍の侵攻後、同交響楽団の同僚や奏者たちが、軍服を着て、楽器を武器に持ち替えて任務にあたる現状を写真とともに紹介しつつ、「彼らが音楽活動を再開できる日に向けて支援活動を続けたい」と話しました。

高谷さんが本年 2 月に設立した日本ウクライナ音楽協会では、国内でコンサートを開くなどして資金集めを行い、侵攻で傷ついた音楽院や楽器の修復などの支援を計画しています。なお、講演会の模様は、東海テレビと中日新聞で報道されました。

大阪大学で「平和のための集中講義」

ウクライナ戦争で連続講座（5 月 2 日～6 日）

大阪大学（大阪府豊中市）で 5 月 2 日から 6 日まで、「平和のための集中講義」が開催されました。ウクライナ戦争を、歴史、政治学、民俗学、科学論、ジェンダーなど多角的に分析し、平和構築の方途を探る連続講座で、学生だけでなく一般市民にも開放された講座でした。

初日の 5 月 2 日には「ロシア研究者から見たロシアのウクライナ軍事侵攻」と題して、藤本和貴夫・大阪大学名誉教授が軍事侵攻の背景とこの戦争の特徴について、伊賀上菜穂・中央大学教授がロシア・ウクライナの民族と言語の問題などについて講演しました。

本号 12 頁以下に、講演録を掲載しています。

日ロクラブで石郷岡建氏が講演（5 月 21 日）

「何が軍事侵攻を引き起したか」

5 月 21 日、日ロクラブの例会が東京お茶の水の連合会館で開かれ、毎日新聞の元モスクワ支局長・石郷岡建氏がウク

ライナ戦争について講演を行いました。石郷岡氏は、ロシア専門家を含めてほとんどの人にとって予想外だった今回のウクライナ戦争について、昨年 1 年間のアメリカ、ロシア、ウクライナの動きを丹念に追うことで、何が戦争の原因となり契機となったのか、詳しく分析。また、ロシアを含むユーラシア大陸中央部の国家の行動原理をその文明論的背景からひも解き、「自由と民主主義」の価値観を押し付けるだけでは問題は解決しないばかりか、かえって対立を激化させてしまう危険があると、大変興味深い話をされました。

講演録は本号 4 頁に掲載しています。

ウクライナ戦争 停戦の仲介を！

「憂慮する歴史家の会」など、日韓の市民・研究者が 国連事務総長宛に公開書簡（7 月 7 日）

前号でも紹介した「憂慮する日本の歴史家の会」が中心となって、7 月 7 日、日本と韓国の市民・研究者が共同で、国連のグテーレス事務総長宛に、ウクライナ戦争の停戦の仲介を依頼する書簡を提出しました。

公開書簡の全文は次頁に掲載していますが、「憂慮する日本の歴史家の会」は、まずは戦闘を止めること、そして交渉によって問題を解決していくことが大事だということで、これに賛同する署名をインターネットで集めています。是非、ご協力ください。

なお、「憂慮する日本の歴史家の会」の取り組みについては、同会のホームページをご参照ください。

<https://peace-between.jimdosite.com/>

日本対文協と麗澤大学が緊急講演会（4 月 15 日）

真殿達氏らが「ウクライナ危機」を分析

4 月 15 日、麗澤大学（千葉県柏市）の真殿達・名誉教授が呼びかけ、日本対外文化協会と麗澤大学の後援で「ウクライナ危機」緊急講演会がオンライン開催されました。

講演会では、まず真殿氏がかつてウクライナ輸出入銀行の再建援助に携わった経験から、ソ連解体後今日までウクライナが依然としてまとまった国になっておらず、何事にも合意形成が困難で、経済再建も進んでこなかった経過が報告されました。それを踏まえて、二人のコメンテーター（小田健・元日本経済新聞論説委員／石郷岡建・元毎日新聞編集委員）が長年のロシア取材の知見に基づいて、戦争の背景と目的、ロシア国内の世論の動向や停戦交渉の行方などについて、対談・討論を行いました。

この戦争によって初めて国内が一致結束したウクライナが、今後どのような国になっていくのかも注目点の一つです。

【国連事務総長宛】ウクライナ戦争の停戦を仲介してください。

Please take steps now for an end to the Ukraine war.



私たち署名者は、国際連合アントニオ・グテーレス事務総長に下記の公開書簡をお

送りました(2022/7/7)。多くの皆様に後押しの賛同署名をいただきたいと存じます。この署名 URL を広めてください。

<https://www.change.org/Stop-War-in-Ukraine>

【韓国語】한일시민 연구자의 공개서한 <https://bit.ly/3NUWz9J>

【English】An Open Letter to The UN <https://bit.ly/3IFed0t> You can sign from any country.

国際連合 アントニオ・グテーレス事務総長宛、日韓市民・研究者の公開書簡

国連事務総長として日夜平和のために働いておられることに敬意を表します。

またロシアの侵攻以来 100 日を越えたウクライナ戦争に対して、事務総長として絶えず発言し、また 4 月に停戦の仲介に動かれたことに対しても、深い敬意をもっております。

私たちは、ウクライナにおける戦争とそれによってもたらされた人道危機を憂慮し、ロシア軍とウクライナ軍が現在地で戦闘行動を停止し、真剣に停戦会談を進めるよう訴えている日本および韓国の市民・研究者のグループです。

現在ウクライナ東部で激戦が展開されているほか、ウクライナのその他の地域も戦禍に晒され、日々おびただしい人命が失われております。私たちは、これ以上の殺戮と破壊が行われぬように、いまこそ国連は停戦に向け動くべきだと考えます。まず、1 日に 100 名をはるかに越える兵士が亡くなり、無辜の市民が殺されているという悲惨な消耗戦の状況があります。そしていまならウクライナ・ロシアの双方が「負けていない」といえる状況があり、両軍ともに停戦する名目が立ち得る段階にいたったと思います。

これまで仲介の労をとってきたトルコ政府に加えて、イタリア政府が具体的な停戦案をまとめ、フランス政府も仲介役を担う意思を表明しています。一方、米政府は当初はロシアの弱体化を公言してきましたが、最近ではプーチン政権打倒までは求めないとやや抑制的になり、バイデン大統領は、ニューヨーク・タイムスへの寄稿(2022 年 5 月 31 日)で「この戦争が明確に終わるのはつまるところ外交を通してのみである」と述べています。

いまロシアはより破壊的な兵器を投入しつつあり、対抗してウクライナにも米欧からより破壊的な兵器が供給されようとしています。いま止めなければ、殺戮と破壊ははるかに巨大になり、憎悪と復讐心の止めどがなくなります。ロシアによる核兵器の使用や世界戦争への拡大の可能性も依然高いと考えます。世界的な食糧難、深刻な飢餓もこの戦争をきっかけに生じつつあります。

いうまでもなく、停戦は講和ではありません。まず武器を置き、双方の間に非武装地帯を設定し、殺戮と破壊を中止することです。国連および国際社会はまずこの停戦を実現すべきです。そして停戦した後に協議、交渉を始め、講和に進んでいくのですが、ここでもより公正な条件を作り出すよう、国連および国際社会は双方の間に入る必要があります。また停戦を維持するために、国際的な監視団の現地派遣も必要になるでしょう。

人類は戦争を引き起こすたびに、二度とそれを繰り返さないことを誓い、それがまた崩されて戦争してしまうという辛い歴史を歩んできました。第一次世界大戦の後には国際連盟の設立、不戦条約締結、第二次世界大戦の後には国際連合が設立されました。核兵器が向き合う冷戦の時代にあっても、核不拡散条約(NPT)はじめ様々な核管理、核軍縮条約が結ばれ、相互信頼醸成措置などが取られてきました。残酷な戦争(朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、アフガン戦争、イラク戦争など)の現実によって何度も希望を打ち砕かれながらも、希望を捨てることなく、戦争防止、不戦に向けて人類は進んできたと思います。人間の安全保障という概念も生まれています。国連は、消されかけた希望の灯を守りとし続けた先頭にいます。

私たちは、事務総長の発言に共感し、事務総長の停戦仲介の動きに励まされ、そして次の行動に期待しています。日本および韓国の世論を停戦に向けて動かしていきたいと考えています。

2022 年 7 月 7 日

岡本厚 「世界」元編集長、岩波書店前社長

和田春樹 憂慮する歴史家の会代表、東京大学名誉教授

明石康 元国連事務次長

羽場久美子 世界国際関係学会アジア太平洋会長、青山学院大学名誉教授

南基正 ソウル大学教授

李海榮 ハンシン大学教授、元韓神大学副総長

伊勢崎賢治 東京外国語大学教授

(ほか、計 106 名+2 団体が署名)

ウクライナ戦争

2022 年 5 月 21 日／日ロクラブ

開戦 5 か月、ウクライナ戦争は長期化の様相を濃くしています。この間、さまざまな団体が、戦争の背景、戦闘の現状を分析し、和平への展望を明らかにすべく、セミナーや研究会、講演会を行っています。以下、ウクライナ戦争について、日ロクラブ例会（5 月 21 日）での石郷岡建氏の講演録と、大阪大学「平和のための集中講義」（5 月 2 日）での藤本和貴夫先生と伊賀上菜穂先生の講演録をお届けします（編集部）

講演録

何がロシアを軍事侵攻に突き進ませたのか

石郷岡 建(元毎日新聞社モスクワ支局長)

誰も予想していなかったウクライナ戦争

2 月 24 日から始まったウクライナ戦争ですが、ほとんどの人が今回の戦争が起きるとは思っていませんでした。アメリカやイギリスが予告したという話はありませんけれども、まさかここまでやるとは思っていなかったという感じです。

古い本ですが、私の大先輩である谷畑良三さん（毎日新聞社元モスクワ支局長）が、「ロシア人とソビエト人～その二つの顔」（河出書房新社、1979 年刊）という本にこう書いています。

「実際に彼らロシア人はぎりぎりの段階で何か事を起こす時には、『野放図』としか言いようもないほどの大胆、率直な行動に打って出る。日本的なせこましい規範はどうも通用しないし、西欧的な合理主義をもってしても『ケタはずれ』のロシア式尺度にうろたえるだけである。”世界を驚倒させた”ロシア革命にしても、イデオロギー的観点だけで完全に解明できるだろうか。遅れたロシアで、世界を震撼させる大革命を成功に導いた原動力は、当時『過激派』と呼ばれた革命家たちとロシア民衆の『ケタはずれ』の行動にあったように思う。」

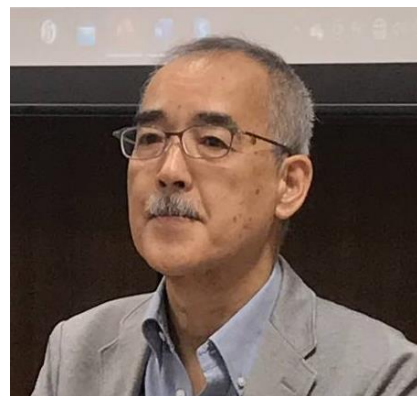
私が今回の戦争で基本的に反省したのは、理路整然としたことを言っていると間違えるということ（笑）。私は戦争なんて起きるとは思っていませんでした。しかし、やっぱりロシアは「ケタはずれ」なことをする国なんですね。昔の先輩はよく見ていたなと思います。

今回のロシアの軍事侵攻、プーチン大統領は「特別軍事作戦」と言っていますが、なぜロシアは軍事侵攻したのか、その背景と理由は何かという時に、当初よく聞かれた回答は、「プーチンは狂った」、「誰も望んでいない戦争を起こした」というものでした。この時にトランプ元大統領が「私が大統領だったら、こんなことにはならなかった」と言った。ロシアに非常に詳しい佐藤優さんも「初めからきちんと取り引きしていれば、こんなことは起きなかった」と言っています。

私もトランプさんや佐藤優さんの言うことに賛成で、これは、本当は戦争をする必要のなかったぶつかり合いではなかったかという感じがしています。

文明の生態史観論から見たユーラシア

地形図を見るとウクライナという国は、西にカルパチア山脈があつてヨーロッパと隔てられており、東にロシアとつながる平原と森林地帯、北に森林と沼地があつて、南にステップ平原が広がっています。



ステップ地域には遊牧民族がいて、西の山地には狩猟民族がいる。昔から遠く中国、インド、イスラム、ロシアともつながって、いろいろな民族がこの地に入りました。西ヨーロッパや日本とは違う雰囲気土地で、その特徴は中央部が乾燥地帯で遊牧民族が多いということです。

このことについて梅棹忠夫さんが「文明の生態史観論によるユーラシアの特徴」ということを言っております。人間の歴史は乾燥地帯か半乾燥地帯から始まった。四大文明の発祥地＝エジプト、メソポタミア、インダス、黄河流域は乾燥地帯・半乾燥地帯で、この気候帯と生活様式は深く絡んでいる。砂漠の乾燥地帯は通商路で基本的に人が住めない。ステップ（草原）地帯は半乾燥地帯で遊牧民族がいて、森林の温暖地帯は農耕民族がいて、さらにロシアの場合には極北に凍土（ツンドラ）地帯の狩猟採取民族がいる。ユーラシア大陸の中央部に大きく広がる乾燥地帯・半乾燥地帯は、周辺の民族からすればいわば「悪魔の巣」で、暴力と破壊の源泉であった。古来、乾燥地帯・半乾燥地帯からやって来る遊牧民が暴力を

ふるい、周辺文明を破壊してきた。梅棹忠夫氏はこのように言っています。

近代発の国民国家と権威主義国家の相違

進化史観によれば人間の社会は一本道のようにいずれは同じところへゆきつく、現状の違いは発展段階の違いであるとされるのですが、生態史観では環境と社会の変化により異なる発展がありうると考えます。

文明の生態史観論によると、温暖気候と乾燥気候では国家観と価値観が違ふ。対比すると、森の社会と草原の社会、農耕社会と遊牧社会、単民族国家と多民族国家という違いです。要するに乾燥地帯は人口密度が低いので、小さな民族単位では国ができなくて多民族国家をつくることになる。それが近代の国民国家と権威主義国家の違いにつながっていくと言うのです。欧州の国民国家の価値観は自由・民主主義ですが、権威主義国家では安定・公平を重視します。

つまり、乾燥気候地帯は人口密度が小さく、人々は広大な範囲に広がって生活をしてきた。コンパクトな国家をつくるのが難しく、広大な範囲を含む国家、複数の共同体をまとめる国家（帝国）にならざるを得なかった。複数の共同体をまとめて国（帝国）を治めていくためには、国家は冷酷にならざるを得ず、独裁もしくは権威主義国家にならざるを得なかった、ということであります。

では国家とは何かと考えると、近代国家には国民国家と領域的主権国家があります。国民国家というのは Nation State です。Nation は日本語では国民という意味と民族という意味があり、国民国家という場合は政治的な概念を主張する。自由と平等ですね。民族国家は文化的概念で、同質性とか連帯性が強調される。「ドイツ民族は...」とか「日本民族は...」とか言うわけで、この民族国家は第二次大戦で国民国家に散々叩かれたという歴史があります。

それに対して、中国、インド、ロシアといったユーラシア大陸の中の国は領域的主権国家で、政治的な概念や文化的な同質性よりも、とにかくまず領土があった、そこに主権ができたという国家です。領域的主権国家は当然、国民国家とは違った原理で動きます。

米国マトロック元駐ソ連大使の言葉

米国のジャック・マトロック元駐ソ連大使が、だいぶ前に「ウクライナは近代的国民国家ではない」ということを言っています。「ソ連崩壊後独立 22 年が過ぎたが、いまだにウクライナのアイデンティティを作りあげられておらず、国民をまとめる指導者が出ていない。ウクライナは国家を形成しているが、まだ国民形成はできていない。(Ukraine is a state, but not yet a nation.)」

発言は以下のように続きます。

①現在のウクライナ領は第二次大戦後、外部の者によってつ

くられた。

②ウクライナの住民は、異なる言語、歴史経験を持ち、はっきりした境界線はない。

③ロシアとの友好的な関係抜きに、繁栄した健全な国家には決してなれない。

④ロシアはウクライナの北大西洋条約機構（NATO）加盟阻止に関しては何でもすると何度も警告している。

⑤ロシアは、下記の 3 つの条件を満たすならば、ウクライナが欧州同盟と協力して政治経済システムを近代化することに反対はしない。

(1) 反ロシアを基本とする国家をつくらない。

(2) ロシア系住民は社会・文化・言語に関し、他の住民と同等の権利を持たせる。

(3) 段階的な欧州への統合はウクライナの NATO 加盟を意味するものではない。

⑥今のところ、ウクライナの過激な民族主義者たちは 3 つの条件を受け入れる気持ちはない。そして、米国はロシアの呪いの対象となっている過激派を大目にみるか、または奨励する政策をとっている。不公平かもしれないがこれが現実だ。

もう 10 年ほど前の発言ですが、今日の状況を見事に言い当てています。

普遍的個人主義と多様的な国家主義

アメリカの民主党バイデン大統領はリベラル「理念主義」であります。理念を非常に大事にする。共和党のトランプ前大統領は「現実主義」であって、理念よりも、利益になるかならないかで物事を判断する。2021 年 1 月にトランプに代わりバイデンが登場したことで、アメリカ政治は米国第一の「現実主義」からリベラル「理念主義」へと転換しました。

ウクライナでも同じようなことがあって、ポロシェンコ前大統領はウクライナの民族主義で、どちらかというと理念よりも利害を重視します。現在のゼレンスキー大統領はユダヤ人なので基本的にウクライナ民族主義にそれほど入れ込まないけれども、理念的ウクライナ主義を出すことによって、バイデンさん同様非常に柔軟ではないという感じを受けます。

このアメリカ、ウクライナと、プーチン大統領のロシアや習近平主席の中国がぶつかるという構図になっています。もう少し言うと、アメリカは西洋キリスト教個人主義、普遍的価値観の国で、「真実は一つである」という考え方ですね。これに対し、中国とロシアの方は、多民族多様な国家主義の価値観で、「真実はさまざまである」という考え方。では、ウクライナはどうかと言うと、普遍的個人主義と多様な国家主義に挟まれた価値観分裂の国である。いわば「真実はどこに？」という感じです。

以上を前置きとして、今回のウクライナ戦争について、戦争に至る経過を振り返りつつ、アメリカとロシアの関係が今後どうなっていくのか、私の見解をお話したいと思います。

1. ウクライナ戦争に至るこの 1 年間の動き

この 1 年間、あまり気づかなかったのですが、国際関係に大きな変化が起きていました。その始まりは 2021 年 1 月にバイデンさんがアメリカ大統領に就任したことです。彼が最初に言ったのは「民主主義は勝利した」という言葉です。自由・民主主義のかけ声とともに、中国とロシアは民主主義でも自由でもないという厳しい態度を打ち出しました。アメリカの国家安全保障戦略方針を発表し、「中国は国際秩序に挑戦する唯一の競争相手だ」と規定します。昨年 1 月の段階ではバイデン政権はロシア・中国との関係において、一番の問題は中国だと考えていたということです。現実主義の立場であれば、中国とロシアの間にくさびを打ち込んで、おそらくロシアに近づいて中国から引き離すという戦略をとったと思うのですが、理念主義のバイデンさんは「両方とも悪い」という戦略をとることになり、それが大きな問題を生み出してきたわけです。

米・NATO 軍の大規模演習とウクライナの「クリミア解放戦略」

「民主主義は勝利した」という宣言の下で、アメリカ・NATO（北大西洋条約機構）は数十年ぶりといわれる大規模な軍事演習を次々と開始します。昨年 1 年間で米・NATO 軍は 10 回の軍事演習を行いました（これに対してロシア軍は 3 回）。最初に始まったのは、「Defender - Europe 21」です。

この動きに乗ったのがゼレンスキー大統領のウクライナです。軍事演習とともに、ウクライナ民族主義の声が高まりました。ゼレンスキー政権は昨年 3 月に「クリミア占領解放・再統合戦略」「クリミア解放軍事安全保障戦略」を打ち出します。ウクライナのアレクサンドル・トゥルコフ大統領顧問は、「Defender - Europe 21」が始まった時に、「軍事演習の意味は、簡単に言えば、ロシアとの戦争だ」と言い放ちました。これにロシアは「カチン！」とくる。プーチン大統領は「ウクライナが NATO 入りすれば、自動的に欧州との紛争になる」と反論しました。

3 月米中外相会議で非難の応酬、風向きが変わる

ところが、そのあとちょっと風向きが変わります。

3 月にバイデン大統領はアメリカの TV インタビューで、「プーチンは殺人者だと思うか」という質問に対して、「思う」と答えてしまう。要するに「プーチンは殺し屋だ」と言ったわけで、「いつもの失言癖が出た」とも報道されましたが、どうもバイデンは習近平もプーチンも同じだと考えていたような感じです。

しかし、同じ 3 月下旬に米中外相会談がアラスカのアンカレッジで行われました。中国外相とアメリカ外相が非難応酬の大騒ぎになった。これでバイデンは「ロシアではなくて中国をやっつけなければならない」と思ったようです。4 月に

バイデンはプーチンに電話をかけて、米ロ首脳会談の開催を提案します。この時、米務省を中心に「これ以上の対立は望まない」というシグナルがロシアに送られてきたといわれています。6 月に米ロ首脳会談が開かれました。

6 月米ロ首脳会談でプーチンが見た「稲妻の閃光」

首脳会談は「たいした話はなかった」ということで終わるのですが、プーチン大統領は会談後の記者会見で「稲妻の閃光を見た」と発言します。新聞記者たちが「それは幻想ではないのか」と反問したら、「幻想ではない」と言った。後にラブロフ外相が明かすのですが、首脳会談でアメリカはウクライナ問題に関して、「ミンスク合意」をもとに解決をはかる方向を確認したのです。

ウクライナ東部のドンバス地方、ドニエツク、ルガンスクの 2 つの人民共和国の独立を巡る紛争をどう解決するかという問題について、フランス・ドイツ・ロシア・ウクライナの 4 カ国首脳がベラルーシのミンスクに集まって協議し締結したのが「ミンスク合意 II」（2015 年 2 月）です。4 カ国の協議で、「ドニエツクとルガンスク（または、ドネツクとルハンスク）はウクライナの領土内に留まる。ただし、この 2 共和国には多くのロシア系住民が住んでいるので特別な自治を与える」ということで妥協が成立し、一旦は合意した。しかしその後、ウクライナの民族主義者たちは「そんなものは認めない」と反発し、ミンスク合意の実行は一向に進みませんでした。これに対してアメリカはどのような態度をとるか。6 月の首脳会談で「アメリカとしてはミンスク合意の履行に同意する。つまり 2 共和国はウクライナに残り、ウクライナ政府は憲法を改正して、ドニエツクとルガンスクの自治を大幅に認める」という形になったわけです。

この時のバイデン大統領は現実主義的な対応だったわけで、それをプーチンは「稲妻の閃光を見た」と表現したのだと思います。しかし、バイデンの頭の中にはまだ理念主義が残っていて、これがトランプだったらそのまま話が進んだと思うのですが、その後やはり話は進まなかった。

8 月米軍アフガニスタン撤退での混乱

そのあとに何が起きたかということ、8 月の米軍のアフガニスタン撤退です。アフガニスタン撤退をめぐるアメリカの混乱ぶりを見たプーチンは、「バイデンとつきあって大丈夫だろうか」と疑念を持ちます。米軍撤退の話は 4 月に始まったのですが、たった数ヶ月で完全撤退するのはもともと無理があった。アフガニスタンのイスラム過激派（＝タリバン）は強力な武装組織で、そういう情報はロシアにも入っていた。しかも、アフガン政府の大統領がロシアに「助けてくれ」と懇願してくるわけです。ロシアとしては関わりたくない。やむなくガニ大統領はパキスタンに助けを求めますが、うまく進まない。そうしてガニ大統領は政権移行協議の最中に国外

逃亡し、米軍に支えられていたアフガン政権は 8 月 15 日に崩壊してしまいました。

日本では状況が全然知られていなかったのですが、こういった事情はイスラム過激派にも筒抜けになっていて、7 月頃にはアフガン政府はもうほとんど崩れ始めていたわけです。ロシア側は全部見ていた。それで、アメリカは何とかするのかと思っていたら、ほとんど敗走という感じで米軍は出て行ってしまったということでもあります。この混乱でアメリカ国内のバイデン支持率は大幅下落しました。

米国の分裂した動き、NATO 軍と一体化したウクライナ軍

その一方で、この 8 月にはウクライナ政権が新たな動きを始めます。クリミア解放をめざした「クリミア・プラットフォーム」という首脳会議を開催し、欧米諸国の首相や大統領を集めて、「クリミアを取り返す」としきりにアピールする。その裏で、アメリカは外交分野と軍事分野が一致していません。外交分野は中国を見ながらロシアとどういう関係を作るかという勘定をするのですが、軍事分野は NATO とつながっていてロシアを困らせたい。そのためにウクライナを軍事的に支援するわけです。ゼレンスキー大統領はアメリカの分裂した動きを見ながら、非常にずる賢く計算しながら動いていきます。

その間に外交関係や軍事関係でどんな動きがあったのかはよくわからないのですが、9 月にロシア軍は大規模軍事演習「西-21」を開始します。これに対して NATO 軍は、3 つの軍事演習をロシアの前でやる。この 3 つの軍事演習にはすべてウクライナ軍が参加しており、ウクライナ軍はほとんど NATO 軍ではないかという扱いでした。さらに核兵器搭載可能な戦略爆撃機や偵察機が頻繁にロシア国境まで飛んでくる。これはロシア軍本部にひどい悪印象を与え、米ロ関係はおかしくなっていくわけです。

さらに 10 月 26 日、ウクライナ軍はドンバス地域のロシア派勢力に対して初めてトルコ製ドローン兵器を使った攻撃を行い、ロシア側に衝撃を与えます。

11 月 17 日、外務省拡大幹部会議、欧州安保交渉の開始命令

ロシアと米国・NATO・ウクライナの関係が軍事的におかしな状況に入っていく中で、11 月 17 日、プーチン大統領は外務省拡大幹部会議を開催します。会議でプーチンは次のように言います。「明日は何が起きるのかわからない」、「長期安全保障の合意が必要だ」、「紛争は必要としない。このことはしっかり頭においてほしい」。この段階ではプーチン大統領はまだ軍事行動開始を考えていなかったことがわかります。この頃にはアメリカでロシアの軍事侵攻の可能性の話が出ていたのですが、そうではなかったということです。

翌 11 月 18 日に、プーチン大統領は欧州の長期安全保障の交渉準備を外務省に命令しました。命令の内容は 3 点です。

①NATO の東方拡大阻止。②ロシア近接地域での対露攻撃兵器の配備阻止（近接地域というのはウクライナ）。③1997 年の NATO・ロシア基本文書当時の軍配備に戻す（つまり、NATO が東方拡大する前の時点までヨーロッパ各国の軍隊は引けという要求）。

そして、プーチン大統領は「西側諸国をできるかぎり、緊張状態に置く」と言います。これが、緊張状態が始まる合図となるのですが、どういうことかということ、ロシアには NATO との交渉で軍事威嚇しか有効なカードがなかったということです。緊張状態に置くという意味は、戦争するということではなく、ある意味で「チキン・ゲーム」（命がけの我慢比べ）を始めるということだったのですが、このチキン・ゲームが後にどんどんエスカレートしていくわけです。

進み始めたかに見えた欧州安保交渉

12 月 7 日、プーチンはバイデンに電話します。「欧州安全保障交渉を進めたい」。バイデンは拒否しなかった。これは、6 月の「閃光」がまだ続いているとプーチンは思ったのではないのでしょうか。

1 週間後の 12 月 15 日、ロシア外務省は欧州安全保障合意の条約草案を欧米諸国に配布し、一般公開しました。

年が明けて 1 月 3 日、米國務省報道官が「米国はミンスク合意の完全履行を支持する」と発表します。これを受けて、1 月 19 日、フランスのマクロン大統領は欧州提案をまとめると説明する。1 月 20 日、バイデン大統領は「ロシアの安全保障の懸念について協議する用意がある」と発言。米英独仏伊の 5 か国＋ロシアの協議機関の設置を提案しました。プーチン大統領にとって、11 月 17 日の外交路線でまとまっていく雰囲気が出てくるわけであります。

東欧諸国の強い反発で頓挫

しかし、この流れに反発したのが、ウクライナと東欧諸国です。東欧ではとくにポーランドとバルト諸国が、バイデンが提案した米英独仏伊＋露の協議機関に強く反対をして、この協議機関ができなくなり、ここから急速におかしくなっていきました。

1 月 27 日、バイデン大統領はウクライナのゼレンスキー大統領に電話をし、ミンスク合意の履行を迫ります。「譲歩せよ」と圧力をかけたわけです。ゼレンスキーはのらりくらりとかわし、従いません。次の日、この電話圧力事件はマスコミにリークされて、大騒ぎになりました。バイデンは圧力を否定し、逃げてしまいます。この時点からアメリカはミンスク合意の履行について何も言わなくなる。欧州安全保障合意構想も前に進まなくなり、沈黙が始まります。

2 月 10 日ですべてが変わった（独仏露ウ 4 国会議）

2 月 10 日に、フランス、ドイツ、ロシア、ウクライナの 4

カ国会議（ノルマンディー・フォーマット）が行われました。この 4 カ国会議でミンスク合意をどう実行するのかを協議してきたのですが、ウクライナはミンスク合意を明確に否定する。フランスとドイツは合意の当事者であるにもかかわらず何も発言しません。この様子をアメリカは遠くから冷ややかに見ていた可能性が強い。事実上、ウクライナ危機の話し合いは決裂しました。

おそらくこれが引き金になった。プーチン大統領は、ドニエツク・ルハンスクの 2 共和国の独立承認文書の作成を命令します。もはや交渉は決裂し、ミンスク合意は反故にされた。2 つの共和国がウクライナ領にとどまる必要はないという決定を下したわけです。

同じ 2 月 10 日、ロシアとベラルーシの共同軍事演習が始まります。さらに同日、バイデン大統領は「ロシアはウクライナへの攻撃準備ができた」「2 月 16 日に侵攻が始まる」と発言、大騒ぎになりました。

つまり、2 月 10 日ですべてがクルリと変わったということと言えると思います。21 年 12 月末から 22 年 1 月にかけてアメリカ、ロシア、ウクライナの間で何が起きていたのか不明な点は多いのですが、私はこの 2 月 10 日に、「特別軍事作戦」が事実上準備に入った可能性が強いと思っています。

実のない外交交渉の継続

2 月 12 日、ラブロフ・ブリンケン、ショイグ・オースティン、プーチン・バイデンの米露の外相、国防相、大統領の電話首脳会談が一斉に行われます。

2 月 14 日、ロシアではプーチン大統領、ラブロフ外相、ショイグ国防相が会談を持ち、「これは外交交渉が必要だ」という発言をして、わざわざテレビに流しました。

しかし、私は、この 12 日、14 日の動きは一種の儀式のようなもので、プーチン大統領はもはや正常な外交交渉が継続されるとは思っていなかったのではないかと思います。

2 月 16 日、バイデン大統領が「ウクライナ領内には米国のミサイルは配備されておらず、欧州安保条約に書き留めてもよい」と発言します。バイデンさんはまだ欧州安保交渉をやってもいいよと言っているわけですが、ではその場合ミンスク合意とドニエツク・ルハンスク 2 共和国はどうするのかという話は出てきません。その一方でゼレンスキー大統領は「クリミアを取り返す」と言っており、実際上はもうロシアに譲歩する意思はないという感じでした。

2 月 20 日、ゼレンスキー大統領「ブタペスト覚書」に疑義

2 月 20 日、ゼレンスキー大統領は 1994 年の核兵器排除の「ブタペスト覚書」の有効性に疑義を表明しました（ミュンヘンでの安保会議）。ブダペスト覚書というのは、ソ連時代にウクライナに配備されていた核兵器を全部廃棄する代わりに欧米とロシアはウクライナの安全保障を守るという合意です。

この「覚書」に有効性がないというゼレンスキー発言の意味を、ロシア側はウクライナが核兵器保有宣言をしたと理解し、衝撃を受けました。

この核兵器保有宣言というのは、実はゼレンスキー以外の政治家たちもしているわけで、ウクライナの国民は酒を飲むと、「あの時（1994 年に）、核兵器を（廃棄せず）持っていればよかったな」と言い合うような雰囲気が今でもあります。実際には、ウクライナは核兵器を作ることもできないし、アメリカが核兵器を配備することもできないと思います。しかし、にもかかわらず、そういう挑発を繰り返すことに対する怒りがプーチンやロシア側にはあったと思います。

2 月 21 日、安全保障拡大会議＝東部 2 共和国の独立承認

2 月 21 日、ロシアの安全保障拡大会議が開かれ、会議の様子がテレビ中継されました。ここで、ドニエツクとルハンスクの独立承認問題が協議され、ほとんど全員が賛成をします。しかし、2 人が賛成しませんでした。「もう少し待ったらどうか」、「最後通告をして、回答する時間を与えたらどうか」と言います。ニコライ・パトルシェフ国家安全保障会議事務局長とセルゲイ・ナルイシキン対外情報庁長官です。2 人ともいわゆるシラビキ（国防・治安・情報機関を中心とする政治グループ）です。シラビキの代表と目される 2 人がなぜか賛成しなかった。これは、この戦争の一つの疑問であります。

なぜならば、この安全保障拡大会議の隣の部屋では、ドニエツク・ルハンスクの代表が来ていて、会議後に独立承認の式典をする予定だったのです。そのことがパトリシェフとナルイシキンには伝わっていなかった。しかも、ナルイシキンは会議でプーチンに問い詰められ、言葉に詰まる様子がそのままテレビ中継で放映されました。ロシアではちょっと起きないようなことが起きていた。プーチンがシラビキに対して非常に冷たい態度をとったのはなぜなのか、これも疑問です。

この日の夜の国民向けテレビ演説で、プーチン大統領は「（東部 2 共和国の独立承認は）核兵器所持否定の見直しをするかもしれないというウクライナ政権へのロシアの回答である」とも説明しました。

2 月 24 日、ウクライナへの軍事侵攻開始

それから 3 日後、2 月 24 日に「特別軍事作戦」が開始されました。2 月 21 日にはプーチンは「ドニエツクとルハンスクに平和維持軍を派遣する」と言っていた。それが 3 日後に「特別軍事作戦」に変わった。3 日間で何かが変わったんですね。「平和維持軍」という言葉はいつの間にか消えて、「ウクライナ東部の軍事行動」と「ウクライナの脱軍事化（＝中立化）」という言葉が登場し、さらに「ウクライナの非ナチ化」という言葉も出てきます。東部 2 共和国の独立承認と平和維持軍の派遣がウクライナ全域への戦闘行動へと変わっていったわけであります。ロシア軍はドンバス地域の親ロ派武装部隊を

支援しながら、ウクライナ各地の軍事施設を大量のミサイルで破壊し、さらにウクライナの首都キエフと東部の大都市ハリコフへ進撃を開始します。このウクライナ全域への攻撃・進撃の意味はいまだにロシア国民に対しはっきりと説明されていません。

以下、ウクライナ軍事侵攻に至るこの 1 年間の動きから読み取れる結論を、いくつかの疑問とともに列挙しておきます。

1 年間の動きから読み取れる結論と疑問

—— プーチン大統領は、欧州安保条約の合意に大きな力を注ぎ、戦後の欧州安全保障秩序の再構築に挑んでいた。しかし、これはかなり焦りながらの動きであった。なぜ急いだのか。欧州安保条約のような大きな課題は 1 年や 2 年でできるものではないにも関わらず、すごく急いでいたのはなぜなのか。

—— 米バイデン政権は、就任当初はロシアに厳しい態度だったが、間もなく水面下の交渉を始め、ロシアの主張にも耳を傾ける態度を示していた。これは中露関係への「くさび」だったのか。背景には、「もはやロシアは国際秩序に挑戦する競争相手ではない」との見下しがあったのではないのか。

—— NATO の軍事支援を受けたウクライナも、ロシアの野望をつぶすべきだとの強硬姿勢で、軍事的圧力をかけることに賛成の立場を度々表明していた。ゼレンスキー大統領は、なぜ性急に「ミンスク合意の拒否」「クリミア解放」といった方針を推し進めようとしたのか。

—— 米露接近と米露反発の二つの流れがぶつかり合い、昨年 11 月から今年 1 月末ごろまでは米露接近の流れの方がわずかながら優勢だった。しかし、ウクライナがミンスク合意の実行を拒否した後、流れは逆転し、米露双方は対決へと向かった。逆転の背景に何があったのか。

—— 決定的だったのは 2 月 10 日の 4 カ国会議で、ウクライナはミンスク合意を拒否し、話し合いは決裂、軍事対決へと移った。以後、焦点は米国との欧州安保条約交渉からウクライナ問題へと移ることになった。

—— ドンバスの親露勢力への軍事支援と、ウクライナ全土のミサイル攻撃は、きちんとした攻撃計画が作られていたと思われる。しかし、キエフ進軍については、政治的にも軍事的にも支離滅裂で、ロシア国民も兵士も軍事行動の大義が感じられない状況である。

—— 軍事的勝利を獲得しても、世界からは軍事力に長けるロシアが小国ウクライナを乱暴にいじめているというイメージでは倫理的敗北は明らかである。これはプーチンの歴史的汚点になる可能性が強い。

—— 今回の軍事作戦に関しては、ロシア指導部内で理路整然とした説明や判断が行われたようには見られない。説得力もなく、怒りの感情を爆発させただけだったとの印象にある。何が、プーチンをしてあのような感情の爆発に走らせたのか、今もってはっきりと説明されていない。ロシア軍部は本当に

ウクライナへの全面進撃に賛成だったのか、疑問が残る。

2. 分析・何のための軍事行動なのか？

プーチン大統領は、特別軍事作戦と称して「ウクライナ東部の軍事作戦」と「ウクライナの非軍事化」をめざす軍事侵攻を展開し、一部は「ほぼ終了した」と語っています。誰もが理解できないのは、首都キエフへの進軍です。一体何のための進軍で、何をするのか、目標は何なのか、ほとんど説明がありませんでした。

説得力ある説明のない軍事作戦

プーチン大統領は、ロシア国家安全保障会議でも、またそのあとの国民向けテレビ演説でも、何も説明していません。ロシア国民からすると、何か突然戦車隊が現れ、キエフへ向かっているような、向かっていないような、何をしたかったのかかわからないという疑問になっています。隣人で親戚関係も多いウクライナ人に向かって攻撃する意味はあるのかという疑問は大きく広がっています。

プーチン大統領は、「特別軍事作戦はウクライナの占領を目指していない。民間人の被害は避ける」と説明しましたが、納得するロシア国民は多くありません。数百万人が住む大都市キエフへ進軍するならば、大規模な民間人の死傷者や住宅破壊が起きるのは明らかで、大統領の発言は矛盾に満ちています。普段は頭脳明晰で、立て板に水を流すように理路整然と話すプーチン氏の普通の姿ではなく、何を考えているのだろうか、自分でもよくわかっているのだろうかとの疑問にもなっています。

「非ナチ化」の意味は？

プーチン大統領は、「非ナチ化」という言葉も使っています。その意味は、第二次大戦でナチスドイツと協力した西ウクライナ（ガリツィア）の過激なウクライナ民族主義者グループを指します。彼らがウクライナ政権を牛耳っているとして、これを罰するというような話をしています。その中にゼレンスキー大統領も加えているのかどうかは、説明がなくよくわかりません。

もし、過激な民族主義者グループを一斉逮捕するというのなら治安関係機関の仕事であり、ゼレンスキーを拘束したいならばヘリを使って大統領官邸に特別治安部隊を派遣するだけで済みます。戦車隊は必要がない。軍隊は重火器を発射するだけで、治安機関のような警察的行動はとれません。

準備なく急に決定されたキエフ攻撃

軍隊はあらゆる状況を予測して、さまざまな作戦計画を作っています。軍事演習のたびに作戦計画が修正されているはずですが、今回の作戦はきちんと練られたとは思えません。かなり稚拙な計画で動いており、その内容・目標もは

つきりしません。キエフ攻撃はウクライナの北のベラルーシから入っています。友好国とはいってもルカシェンコ大統領の了解を得ねばなりません。そして、ベラルーシとの合同軍事演習は 2 月 10 日から 2 週間の予定で、「ミンスク合意」を巡る 4 カ国協議が決裂した日に始まりました。それまではベラルーシで大規模な部隊の演習はありませんでした。

つまり、北からのキエフ進軍は、あらかじめ時間をかけて練られた計画ではなく、今年の 1 月から 2 月にかけて欧州安保構想が崩れかけた時期に、突然何かが起きて、決定された計画だった可能性が強いと思います。それはプーチン大統領の独断の、そして何らかの感情の高まりによる拙速のキエフ攻撃だった可能性が強く、怒りの感情がウクライナにぶつけられたと考えると分かりやすいと思います。

いずれにせよ、国民も兵士も、軍事行動の意味や大義が感じられないとすると、プーチン大統領の戦争が勝利する可能性は少ないと言わざるを得ません。

プーチン大統領に何か異変か？

もしかすると、プーチン大統領の体調は良くないのかもしれない。私のモスクワの知り合いは「今年の 1 月～2 月頃は、明らかに何らかの健康上の問題を抱えていたようだ」と言っています。



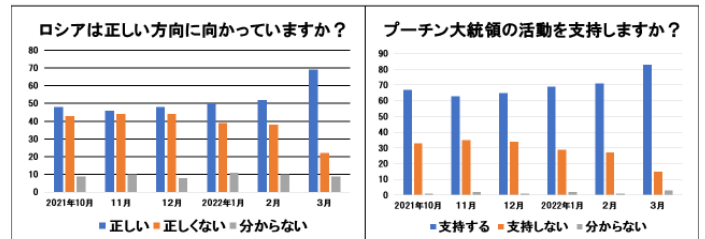
写真は、プーチン大統領の政府関係者との不思議な会合風景です。プーチン大統領は右端にいますが、政府関係者はなぜか左端に一団となって座っています。コロナ対策だとすると、なぜ政府関係者がくっついていてのか、プーチンはなぜこんなに離れているのか、プーチンは何かおかしいのではないかと疑わせる写真です。

プーチン政権支持率の急増

では、ロシア国民はこの戦争をどう思っているのか。世論調査ではプーチン政権支持率は急増しております。ロシアの世論調査機関「レヴァダセンター」が発表した 3 月 30 日の調査結果によると、「ロシアは正しい方向に向かっていますか？」という質問に対し、『正しい方向』と思っている人が今年 1 月の 50% から 3 月の 70% 近くになっています。「大統領の活動を支持しますか？」という質問にも、『支持する』が

1 月の 70% 弱から 3 月の 80% 超に上がっている。米露関係がおかしくなり 2 月の戦争が始まるあたりから支持率がグンと上がっているということで、グラフには 4 月の支持率は出てないですが、4 月のプーチン大統領の支持率も支持 82%、不支持 17% とそれほど変わっていません。

プーチン政権支持率の急増 (ロシア世論調査機関「レヴァダセンター」、2022-03-30)



★ロシア世論は、ウクライナ軍事作戦開始後、戦争、大統領支持が急速に高まった。

もう一つ、ロシア社会のウクライナ戦争の見方について、4 月 48 日の調査結果も一緒に載せておきます。

ロシア社会のウクライナ戦争の見方 (レヴァダ・センターの世論調査結果、2022 年 4 月 28 日)	
◇あなたはウクライナ情勢は心配ですか？ 心配だ(82%) 心配ではない(16%)	◇あなたは個人的にロシア軍の行動を支持しますか？ —<3 月と 4 月調査の比較>— 支持する(81% → 74%) 支持しない(14% → 19%)
◇何が心配ですか？ ①人々の死と破壊と苦悩(47%) ②軍事行動、戦争がないように(26%) ③いつ終わるのか、長く続くのか、将来はどうなるのか、何も分からない(13%) ④ナチス、ファシスト、ウクライナ民族主義者(6%) ⑤軍事行動がロシアへ拡大していくこと(5%)	◇特別軍事作戦はどの程度うまくいっていますか？ うまくいっている(68%) うまくいっていない(17%)
◇軍事作戦は、どのように終わりますか？ ロシアが勝利する(73%) どちらも勝利できない(15%)	◇なぜうまくいっていると思いますか？ ①すべてが計画通りで、目標も達成されている(27%) ②ドネツクが解放され、ファシストを追い払っている(25%) ③我々は強く、軍隊も強い(13%)
◇人々の死と破壊はだれの責任だと思いますか？ ①米国と NATO 諸国(57%) ②ウクライナ(17%) ③誰もでない(8%)	◇なぜうまくいっていないのですか？ ①戦闘が長引き、終わりは見えない(48%) ②一般市民や子ども、兵士が死んでいる(21%) ③準備不足、戦術の失敗、ミス、プロ意識の欠如(9%)

ロシア国民は情報遮断されているわけではない

この世論調査を見て、「ロシア国民は報道が規制されているから何も知らない」というコメントがよく聞かれます。しかし私は「それは違う」と思います。ロシア人はそんなに馬鹿ではないです。確かにロシアの国営テレビは政権のプロパガンダ（政治宣伝）を流していますが、テレビ以外の新聞や雑誌などは結構きちんと報道しており、ロシア人はみな読んでいます。私はコメルサント紙を毎日読んでいますが、ほとんど正確に事実が報道されています。

私の友人でウクライナ出身のロシア人で、お兄さんはウクライナ女性と結婚し、妹はウクライナ男性と結婚しているという人がいます。彼はソ連が崩壊した時は非常にリベラルだったんですが、今は全くのロシア民族主義者になっています。「どう思うか？」と電話で聞いてみたら、「俺はロシアのテレビとウクライナのテレビの両方を見ている。両方とも全く正反対のことを言っていて、何が何だかよくわからない」という話です（笑）。

欧米報道も一面的で注意が必要

欧米を中心とした報道では、ウクライナがすべて正義で、ロシアはすべて悪であるというような話ですが、これは間違

っています。戦争をしていけば両方とも悪いことが一杯出てくるわけで、どっちか一方だけがやっているわけではありません。

報道には間違いが多いし、それから意図的なデマ情報も紛れ込んでいます。最近、ドンバス地域から 120 万人のウクライナ人がロシアに強制連行させられたという話が出ましたが、120 万人もの人を無理矢理移動させたら大騒ぎになる。そういうことが証拠も上げずに発表されています。

もう一つは、アレクスター・ヴィッチ大統領顧問が「NATO との軍事演習の意味はロシアとの戦争だ」と 1 年前に言いましたが、ウクライナ側から敢えて相手を挑発する大げさな発言が多いのも問題です。

「混乱は困る」強い国家を求めるロシア人

では、欧米諸国が言うように「プーチンは支持されていない」ということだとすると、ロシアの世論調査で「支持されている」という高い数字が出るのはなぜなのか。ちなみにレヴァダセンターは政府系の世論調査機関ではありません。独立した組織で、むしろロシア政府からいじめられている組織です。

私の考えでは、ロシア人たちが考えているのは「混乱は困る」ということです。30 年前のソ連崩壊後のロシアは散々混乱しました。その前には戦争（第二次大戦）で混乱したし、その前にはロシア革命と内戦で混乱した。「国家が弱くなると何が起きるか分からない」、そういう危機意識が非常に強いわけです。プーチンの戦争を支持するという意味は、ロシアの軍を支持するという意味もあるのですけれども、それよりも国が無政府状態になることへの恐れの方が強いと思います。

つまり、最初の話にもどるわけですが、ロシアは独裁国家とは言い難いと思いますが、仮に専制国家と言ってみると、この領域的主権国家の場合やはり「自由・平等」だけでは国が安定しない。強い国家を維持しないと 200 近い多民族の国が崩れて大変なことになるという意識が強いのだと思います。

ロシア人とウクライナ人

プーチン大統領は昨年 7 月「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」という論文を発表して、「ロシア人とウクライナ人はもともと一つの民族だ」「一つの国だ」と言いました。ウクライナは反発していますし、またロシアの知識人の間からもプーチンの論理には無理があるという意見が出ています。しかし、先ほど紹介した私の友人のように兄弟姉妹がウクライナ人と結婚しているロシア人は普通にいますし、混血している人もたくさんいるわけです。逆にウクライナでは、ウクライナ国民の 5 分の 1 はロシア人であり、また国民の半数はウクライナ人も含めてロシア語をしゃべっています。

ウクライナのパドリャク大統領顧問は、「われわれはヘル

ソン州、東部 2 州、ハリコフ州などの地域を完全に取り戻す。そしてこの地域からロシアもしくはロシア人を完全に排除する」と言っている。こういう言い方が「ナチス」ということになるわけですが、「ウクライナからロシア(人)を排除する」というようなことを本当にウクライナ人はめざしているのか、かなり疑問だと思います。今回のプーチンが起こした戦争は確かにひどい戦争で、多くのロシア語系ウクライナ人たちは「もうロシア語はしゃべらない」と言っていますが、先ほどのマトロコック元大使にもどると、そう簡単に離れられるのかどうかという気がします。私はそんな簡単ではなくて、混乱の方がずっと続くのではないかと思います。

「ソ連崩壊はまだ終わっていない」

ウクライナ人とロシア人の関係について、ロシアの専門家からは「ソ連崩壊後これだけ時間が経つと、若者たちの意識はもう離れてしまっている」という意見が多く出ました。それと同時に出てきたのは、「ソ連崩壊はまだ終わっていない」、「終わっていないからまだ続くんだ」、「50 年後には今の国境線はあちこちで変わっているだろう」といった話です。

私は、「ソ連崩壊はまだ終わっていない」、この言葉で全部集約できるのではないかと思います。ソ連崩壊が終わっていないとすると、これからもっと酷いことが起こるかもしれない。その理由は、ロシア革命から第二次大戦を通して、現在の旧ユーラシア地域の国家の正当性というものはそれほど明確に確立しているわけではないからです。中央アジアに行けば分かりますが、急ごしらえに作った国家ばかりです。ウズベキスタンとキルギスとの国境線は山岳地帯にあります。普通は山の上が国境線なのですが、あの地域は山から下りたところに国境線がある。山麓にいる人たちは山を越えて向こうに行くよりも下に降りて隣の国に行くわけです。そういう不自然な国境線がたくさんあります。それから、やたらと飛び地の領土が多い。ここはキルギスで周りはウズベキスタンだというような飛び地ですね。それが大問題になっているのはナゴルノ・カラバフをめぐるアゼルバイジャンとアルメニアの紛争です。

乾燥地帯・半乾燥地帯の国では、要するに民族ごとにまとまっていって飛び地がいっぱいできてしまうということになるわけで、いろんな民族が集まった国を「自由と民主主義でまとめましょう」と言っても、そんなに簡単なものではありません。その価値観の違いを欧米は分かっているとは思いません。そういう意味で一番まずいのはリベラルです。リベラルは理念主義で、「自由と民主主義が唯一の価値観だ」と言って、それをあらゆる国に押しつけようとするわけで、そこからさまざまな紛争の火種が発生してくる危険性が高いと思います。

(2022 年 5 月 21 日、日ロクラブでの講演)

ロシア研究者から見たロシアのウクライナ軍事侵攻

ウクライナ戦争をめぐる諸問題

藤本和貴夫（大阪大学名誉教授、大阪日ロ協会理事長）

2 月 24 日に突然始まったロシア軍のウクライナ侵攻ですが、われわれロシア研究者はほとんどこれを予測しませんでした。予測していたのはアメリカの諜報関係者だけで、今から考えるとアメリカは知っていたわけですね。むしろ侵攻を促すかのように情報を流し挑発していたのがアメリカで、ロシアはそれに乗ってしまってウクライナに侵攻したという感じです。

I. ロシアのウクライナ侵攻前夜

われわれにとっては突然の侵攻でしたが、実はその前にいろいろな前提がありました。今回の軍事侵攻がいつから始まっていたのか、少し考えてみます。

プーチン論文「ロシア人とウクライナ人の一体性について」

2021 年 7 月 12 日にプーチン大統領は「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」という長大な論文を大統領府のホームページに発表しました。「一体性」というのは、「ロシア人とウクライナ人それにベラルーシ人、この三つの民族は基本的に同一のルーツから発生した。だから変わらないのだ。同じ民族なんだ」という議論です。これはロシアでは帝政時代からある議論です。

ウクライナという国が歴史上成立したのは 1917 年のロシア革命の影響です。1918 年にキエフ・ラダが独立を宣言しドイツと独自の講和条約を結んでいます。それまでこの地域は帝政ロシア領内の地方・諸県の一部でした。革命後に一時独立したウクライナは、そのあと曲折を経てソ連邦に組み込まれたわけですが、ソ連が崩壊する 1991 年の夏にウクライナ共和国として独立します。ベラルーシも同じです。現在の国家の形は、基本的に 1991 年のソ連解体後にできあがった国家で、それ以前はソ連邦の一共和国、さらにそれ以前はロシア帝国の一部だったということです。かつて帝政時代には、ウクライナ人は小ロシア人、ロシア人は大ロシア人、ベラルーシ人は白ロシア人という言い方をしていました。それで「ロシア人で一緒だ」という話が出てくるわけですから。

プーチン論文が発表された時、われわれは気にしていなかったのですが、これが結局、ロシアがウクライナへ侵攻する布石になっていたと考えられます。

昨年秋以降に緊迫化した軍事緊張

具体的に軍事的な動きがでてくるのは、9 月 10 日のロシアとベラルーシの合同軍事演習です。これは毎年やっているものですが、この時はベラルーシとウクライナの国境付近で軍事演習を行いました。

10 月 26 日、ウクライナ軍は東部（ドニエツク、ルガンスク）の親ロシア勢力に対して最新兵器であるドローン（無人機）を使った攻撃をやりました。ウクライナ東部では親ロシア派の人たちが独立運動をやって、2 つの州の半分ぐらいをそれぞれ支配し、ウクライナ中央政府と紛争が続いてきたのですが、これに対して政府側が軍事的攻勢をかけたわけです。

12 月 3 日に米ワシントンポスト紙が「ロシアが最大 17 万 5 千人を動員してウクライナ侵攻を計画している」と報じました。プーチン大統領がいつ侵攻の実行計画を立てたのか、あるいは実行命令を出したのかについてはいろいろな説がありますが、アメリカはかなり早くからこの情報をつかんでいたようです。

アメリカとの安全保障交渉が思うように進まず、プーチン大統領が「レッドラインを越えた」と言うのが 12 月 21 日です。プーチン大統領は「攻撃的な態度をとり続けるのであれば軍事的措置を取る」と欧米諸国を非難します。

対立がさらにはっきり出てきたのは今年になってからで、1 月 18 日にイギリスがウクライナに対戦車ミサイルを供与すると発表しました。ウクライナとロシアの関係が緊迫化する中で、1 月 26 日にフランスとドイツが間に入って仏独露ウ 4 カ国外相会談がパリで開かれます。

しかし、この段階では、「ロシアは軍事的措置をとると言っているけれど、まさか実際に攻撃はしないだろう」というのが、われわれを含めた多くの人の見方でした。

「全ロシア将校連盟」の声明（1 月 31 日）

あとからわかったことですが、1 月 31 日に「全ロシア将校連盟」（会長：レオニード・イワシヨフ退役陸軍大将）という団体が、これは軍と治安機関、情報機関（いわゆるシロビキ）の退役将校の組織ですが、「大統領と市民への呼びかけ」という声明を発表しています。声明では、プーチン大統領に対して戦争を挑発するような孤立政策を否定し、自由選挙を準備して退任することを要求。戦争開始決定の取りやめを求めています。すごい話ですが、マスコミには報道されず、その当時は注目されませんでした。

声明は現在も全ロシア将校連盟のホームページに消去されずに載っていますが、発表は 1 月 31 日なんですね。この段階で、退役軍人連盟の中で何回も議論して声明を作成したという話で、この時にはすでにロシアの一部軍事関係者や専門家の間で軍事侵攻計画が知れていたということになります。

フランス、ドイツの仲介努力も奏功せず

2 月に入ると、プーチン大統領は北京冬季オリンピックの開会式に出席し、習近平国家主席と会談、「NATO 拡大反対」の共同声明を発表しました。アメリカとヨーロッパ、とくにフランスとドイツは何とか緊張を収めようと何度も会談を繰り返しますが、なかなかうまく進みません。

この間の動きを列挙すると以下のようになります。

2 月 7 日 モスクワでプーチン・仏マクロン会談。

2 月 8 日 キエフでゼレンスキー・マクロン会談。マクロンは「ミンスク合意」の履行を迫る。

2 月 10 日 ベルリンでロシア・ウクライナ・フランス・ドイツ外相会談。ウクライナはミンスク合意の履行を拒否。

2 月 10 日 ロシア・ベラルーシ合同軍事演習開始。

2 月 12 日 バイデン・プーチン電話会談。

2 月 15 日 モスクワで独シュルツ首相・プーチン会談。

実行されなかった「ミンスク合意」

ロシア・ウクライナの紛争あるいはウクライナ東部の紛争を回避するために、基本的には「ミンスク合意」に戻れというのが、仲介に入ったドイツ、フランスとロシアの主張です。

2014 年 2 月にキエフでマイダン革命が起り、当時のヤヌコビッチ大統領がロシアに逃亡すると、ロシアは間髪を入れずにクリミアを併合する。これに連動して、親欧米を掲げるウクライナ新政権が民族主義的な政策を進めようとしたことに反発したウクライナ東部の親ロシア勢力が 2 つの共和国を作って独立を宣言、中央政府との武力紛争が発生しました。この紛争を平和的に解決するために、15 年 2 月にドイツ・フランス・ロシア・ウクライナの 4 カ国がベラルーシのミンスクに集まって調印したのがミンスク議定書＝ミンスク合意です。これは、即時停戦と同時に東部 2 州に特別な地位を与える（独立国家として承認しないが、ウクライナの中で広範な自治権を付与する。そのことによってウクライナの統一を保つ）という合意です。

これはウクライナも一度は賛成した合意です。しかし、ウクライナ側はなかなか実行に移さない。ゼレンスキー大統領は、大統領選挙ではロシアとの和解を掲げて当選したのですが、その後国内からの強い反発を受けて、ミンスク合意を拒否する方向に変わってしまいました。

戦争開始の合図

2 月 15 日、ロシア下院は、ウクライナ東部で親ロシア派が名乗るドネツク人民共和国とルハーンシク人民共和国の独立承認を大統領に要請する決議を行いました。

2 月 19 日、ドネツク人民共和国とルハーンシク人民共和国で「総動員令」が布告されます。総動員令の布告は公式に戦争準備

を開始するということですから、これは宣戦布告と同じです。

2 月 21 日、ロシア安全保障会議が開かれて、ドネツクとルハーンシク両人民共和国の独立が承認されました。プーチン大統領は二つの人民共和国の独立を承認する大統領令に署名し、「平和維持」を目的としてウクライナ東部地域へロシア軍を派遣する命令を出しました。そしてこの日、プーチン大統領は「ウクライナの出来事について」ロシア国民向けのテレビ演説を行う。これが戦争開始の合図となりました。

II. ロシア軍ウクライナ侵攻

2 月 22 日、NATO（北大西洋条約機構）諸国は第一弾の経済制裁を発動しました。

2 月 23 日にゼレンスキー大統領はドンバス占領地を除く全ウクライナに非常事態宣言を発令しました。米国防省高官は「ロシア軍部隊が出動準備を完了した」と発表する。アメリカは人工衛星で空から見ていますから、ロシア軍の動きは全部わかっているわけですね。普通ならこれは軍事機密です。これを公表する。軍事機密は通常公表しないものですが、その情報を早くから出してアピールするというのが今回のアメリカのやり方です。

「特別軍事作戦」という名の全面侵攻

2 月 24 日、プーチン大統領はウクライナ東部で「特別軍事作戦」を開始したとテレビで演説しました。目的は、ウクライナの「非軍事化」と「非ナチ化」であると言います。ロシア軍は、北部ベラルーシ、東部ドンバス、南部クリミアからウクライナに全面侵攻を開始する。ウクライナは戒厳令を発令し、ゼレンスキー大統領は 18 歳から 60 歳までの男性に動員命令を出しました。

ここで問題は、ロシア側は 21 日には東部の 2 共和国の独立を支援する、そのために「平和維持軍」を派遣すると言っていたわけですから、当然ロシア軍は東から入ると思ったら、実は北からも南からも東からも全面侵攻したことです。全ウクライナを占領するという形での侵攻で、2 つの共和国を支援するだけではないということがはっきりするわけです。

もう一つの問題は、ロシア軍が最初に占領したのがチェルノブイリ原発です。原発の恐ろしさをどこまで知った上で軍事標的にしたのかよくわからないのですが、ロシア軍は専門家を連れて行っていない。あとで分かってきたことは、チェルノブイリ原発の周辺は原発事故で高濃度汚染されているにも関わらず、汚染された草むらを掘って塹壕を作っていた。おそらくロシア軍兵士はものすごい被ばくをしているはずですよ。

南部の稼働中の原発も占領しましたが、原発に関わって、放射線被ばくの問題がこれからロシア軍で出てくるだろうと言われています。

予定通り進まなかったロシア軍の侵攻

侵攻の当初、多くの人は「この戦争は 1 週間で終わるだろう」と思っていました。

というのは、ロシアとウクライナの軍勢力を比較して見れば一目瞭然です。人口はロシア 1 億 4587 万人に対してウクライナ

4399 万人。兵力は、軍人がロシア 85 万人、ウクライナ 20 万人。陸軍、空軍、海軍とも圧倒的にロシア側が多く兵器をそろえて

ロシアとウクライナの軍事力比較

		ロ シ ア	ウクライナ
兵力	軍人	85万人	20万人
	予備役	25万人	25万人
	準軍事組織	25万人	5万人
陸軍	戦車	12,420	2,596
	戦闘装甲車両	30,122	12,303
	自走砲	6,574	1,067
	ロケット砲	3,591	490
空軍	戦闘機	772	69
	攻撃ヘリ	544	34
海軍	駆逐艦	15	0
人口		1億4587万 (2019)	4399万 (2019)

いる。ほとんどの人がウクライナはすぐに降参するだろうと思ったのですが、実はそうならなかった。ゼレンスキー大統領は引き下がらずに、徹底抗戦を呼びかけ、ウクライナ市民も結束して戦っています。

ロシア軍は最初の段階でキエフ(キーウ)へと侵攻し、戦車を連ねて進軍しました。しかし、解氷した湿地の泥濘とウクライナ軍の対戦車兵器に阻まれて、思うように進軍できません。ウクライナはキーウ防衛のために領土防衛軍を配備しました。

NATO 軍に武装化されていたウクライナ軍

ロシア軍は侵攻当初、ウクライナ国内の主要な空港や軍事基地に一斉ミサイル攻撃を加えましたが、なぜか制空権を完全に取りえないまま、地上軍の進軍を開始しました。ロシア側は現在も制空権を確保できていません。結局、後でわかることは、アメリカ・NATO 軍がウクライナに最新兵器を提供して、相当な訓練を行っていた。しかもウクライナ国内だけでなくアメリカまで兵士を連れて行って訓練していたのです。外からは分からなかったのですが、アメリカのテコ入力で、ウクライナ軍はほとんど NATO 軍の一員と言ってよいくらい武装化されていたということです。

この戦争では、NATO は表向き軍事介入しない、アメリカも軍事介入しないということになっています。しかし、2月26日、米ブリンケン国務長官はウクライナに最大3億5千万ドルの軍事支援を発表しました。携帯用対戦車ミサイル「ジャベリン」の供与も同時に表明しています。翌27日、ドイツは対戦車砲1000基、携帯用対空ミサイル「スティンガー」500基のウクライナへの提供を決定しました。

ですから、侵攻はロシア軍が最初に計画していた通りには進まない。おそらくロシア側は、まずキエフを占領して、ゼレンスキー大統領を拘束し、傀儡政権を立てる予定だったのだと思いますが、そのプランは全くうまくいかなかったわけです。

片方で戦争、もう一方で停戦交渉

戦争が長期化の様相を見せる中で、まず求められるのは両軍の停戦です。実はこの戦争では最初の段階から停戦交渉をやっています。侵攻翌日の2月25日にゼレンスキー大統領はロシアに停戦交渉を申し入れています。そして2月28日、ベラル

ーシのプリピャチ河地域で1回目の停戦交渉が開始されました。第2回の停戦交渉は3月3日、ベロヴェジャ原始林で行われました。この停戦交渉でまとまったことはただ一つ、「人道回廊」(戦闘で取り残された市民の避難路)を作るということ。これだけは最初の段階から合意されていたのですが、ただどう実行するかがあとで問題になりました。

つまり、片方で戦争をやりながらも一方で停戦交渉をやっているというのがこの戦争のもう一つの特徴です。普通なら戦争がある程度のところまでいって、それから停戦交渉を始めるのですが、今回は始まった当初からロシア側も停戦交渉に応じています(もちろんロシアにはロシアの意図がありますけれども)。

避難の応酬、戦況は膠着

戦争開始とともにアメリカ・NATO 諸国は一斉にロシアを非難し、ウクライナへの軍事支援を表明しました。これに対してプーチン大統領は、2月27日、NATO 加盟国の攻撃的な発言を非難し、国防相に「ロシア軍の抑止力を特別警戒体制に引き上げる」ことを命令します。「特別警戒体制」というのは核兵器をいつでも発射できる状態に置くということのようですが、これはNATO 軍の介入を阻止するための「核による脅迫」と言われています。

3月1日、アメリカ・バイデン大統領は一般教書でプーチン大統領を名指して批判しました。

3月2日には国連総会緊急特別会合が開かれ、ロシア非難・早期撤退決議が行われます(賛成141、反対5、棄権35)。ロシアは常任理事会での拒否権を持っていますから実効性はありませんが、しかし、国連決議は国際世論に訴えかける効果があります。

3月4日、ロシア軍がウクライナ南部のザポリージャ原発を占領しました。

3月5日、ロシア軍はキエフ(キーウ)郊外の町、ブチャとホストメリを制圧します。結局、ロシア軍はキエフ占領を諦めて撤退するのですが、その後、大量の民間人の死体が出てきて、これが大問題になります。

3月7日、ベラルーシで3回目の停戦交渉が行われましたが、実りはありませんでした。

ここで間に入ったのはトルコです。3月10日にトルコで、ウクライナ・ロシア・トルコの外相会談が行われます。ここまでは対面で交渉をやっていたのですが、それ以後はオンライン方式で停戦交渉が行われることになりました。しかし、戦争の長期化とともに停戦交渉は滞ります。

封じ込められたロシア国内の反対運動

この間、ロシア国内ではどうなっていたか。戦争が始まると、モスクワ、サンクトペテルブルグ、さらにウラジオストクなどでも、市民の戦争反対運動が起こります。各地で集会が行われ、われわれの知り合いもみんなフェイスブックなどの SNS に集会の写真を載せるなど、非常にたくさんの人たちが行動を起こしました。

しかしプーチン政権は市民の運動を力でねじ伏せます。「軍事作戦」を「戦争」と言うだけで「デマ情報」を流した罪で処罰される法律が作られるなど、現在はほとんど表立った反対運動がやれない状態になっています。戦時中は反対運動が非常に難しいのは事実ですが、しかし、普通は戦争が始まると「勝った」「勝った」と人々が熱狂するわけですが、ロシアではそうならなかった。開戦当初に大きな反対運動が起こったということは、今後の動きにいろいろと関係してくるのではないかと思います。

ただ、もう一方でロシア国内のキャンペーンがものすごいんですね。3 月 18 日にモスクワのオリンピックスタジアムで「クリミア併合 8 周年記念コンサート」が開かれました。プーチン大統領は「ウクライナ東部でロシア人が集団虐殺(ジェノサイド)の危機に曝されている。特別軍事作戦の目的は人々を苦しみと虐殺から救い出すことだ」と演説する。ロシアのテレビではこの演説が繰り返し流されました。インタビューで「この侵攻は正しい」と人々が答える時は、「虐殺から救い出す」というのが必ず出てきます。このキャンペーンはロシア国内でかなり効いているのではないかと思います。

ロシア軍のキエフ撤退と停戦交渉の再開

ロシア軍は当初、短期間でキエフを占領して、ゼレンスキー政権を倒す計画でしたが、キエフはもちこたえました。ロシアは方針転換して 3 月下旬にキエフ周辺から撤退を始めます。

3 月 27 日、ウクライナ国防省は、ロシアの作戦の焦点は南部と東部に移ったと発表しました。ロシアはウクライナの東部と南部を切り取って、南北朝鮮のようにしようとしているというのがウクライナの見解です。

3 月 29 日、トルコのイスタンブールで、両国外相による対面式の停戦交渉が再開されました。ここで、お互いの主張が少し明らかにされています。ロシアの戦争目的の一つはウクライナの NATO 加盟阻止です。ウクライナは関係国による安全保障と引き換えに、NATO 加盟を断念し中立化すると表明しました。ウクライナ側の案では、国連の常任理事国とドイツ・イタリアを加えた「安全保障国」で安全を確保する。ロシア側もこれに乗る方向だったのですが、4 月 1 日にロシア軍撤退後のブチャで大量の民間人の遺体が発見され、これで様相が変わってしまいました。アメリカはどうも「安全保障国」案には反対だったらしく、そういうこともあって、ブチャ事件で雰囲気ガラッと変わり、停戦交渉は再び行き詰まってしまいました。

ウクライナの NATO 加盟問題

ここでウクライナの NATO 加盟問題について簡単に説明しておく。米ソ冷戦時代にはワルシャワ条約機構と NATO(北大西洋条約機構)の二つの軍事同盟が対立していました。ソ連のゴルバチョフは東西冷戦の終結とともにワルシャワ条約機構の解散を決定した。そして東西ドイツの統一交渉で、アメリカと西ドイツは「統一しても NATO を東側には拡大しない」と約束したとロシア側は理解している。NATO 側はそんなこと言った覚えはないと言っていますが、ソ連崩壊後も NATO は存続し、その後旧

東欧諸国やバルト諸国へと拡大を続けてきました。

その NATO に今度はウクライナが入るということで、いわばロシアの国境地帯まで NATO 軍が来て、そこに長距離弾道弾が置かれたら、これは重大な脅威である。ロシアの安全保障ができないということで、ロシアは強硬に反対しているわけです。

これは日本の北方領土問題でも同じ議論があります。ロシアが北方 4 島を日本に返して、そこにアメリカ軍の基地ができると、安全保障上の深刻な脅威となるというのが最近のロシア側の主張です。

4 月以降、戦争の焦点は東部と南部に移る

4 月 7 日、国連総会でロシアの国連人権メンバー資格停止が決議されます(賛成 93、反対 24、棄権 58、無投票 18)。3 月 2 日の即時撤退決議と比べると、賛成票が減り、反対・棄権票がかなり増えました。

驚いたのは、4 月 9 日にロシア軍が初めてこの戦争の総司令官を任命したことです。南部軍管区総司令官ドボルニコフ上級大將がウクライナ侵攻軍の総司令官に任命されました。これもよくわからない話ですが、ロシア軍はそれまで総司令官なしで、それぞれの部隊が連携もせず勝手に作戦を進めていたのかということです。

もう一つの動きは、4 月 13 日、北欧のフィンランドとスウェーデンが NATO 加盟の意欲を示したことです。ロシアの隣の国々ですが、これまで NATO に加盟せず中立でやってきたのですが、この戦争で安全保障の不安が高まり、NATO に加盟すると言い出しました。

4 月以降、ロシア軍は東部と南部に戦力を集中し、ドネツクとルハーンシクの制圧に力を入れます。ドネツク州南部の要衝都市マリウポリとアゾフスターリ製鉄所の攻略ですね。その後も戦争はますます長期化の様相を呈しているというのが 5 月始めの状況です。

Ⅲ. ロシアの戦争目的とこの戦争を止める力学

結局、ロシアの戦争目的は何だったのか。2 月 21 日と 2 月 24 日のプーチン大統領のテレビ演説によれば、それは以下の示すように、第一にウクライナの NATO 加盟阻止。第二は、東ウクライナ地方のロシア人救出です。

2 月 21 日プーチン演説「ウクライナの出来事について」

1. 2021 年 12 月に「われわれは、改めてアメリカやその同盟諸国と、ヨーロッパの安全保障の原則と NATO 不拡大について合意を成立させようと試みた。すべては無駄だった」。
2. 「アメリカとその同盟国にとって、これはいわゆるロシア封じ込め政策である。(略) 一方、わが国にとっては、それは結局のところ、生死を分ける問題であり、民族としての歴史的な未来に関わる問題である。これこそ、何度も言ってきたレッドラインなのだ。彼らはそれを越えた」。

NATO 拡大がロシア封じ込め政策であることは間違いありませんが、これが「生死を分ける問題」だと言われてもわれわれに

はよく分からない。しかし、ロシア国内ではこれは一応受け入れられている議論です。

2 月 24 日プーチン演説

「... ドンバスの人民共和国はロシアに助けを求めてきた。これを受け、国連憲章第 7 章 51 条とロシア安全保障会議の承認にもとづき、また... ドネツク人民共和国とルガンスク人民共和国との友好協力条約を履行するため、特別な軍事作戦を実施する決定を下した」。

先ほど言ったように、これはロシア国内でものすごく宣伝されています。「ドンバス地方でロシア人が虐待されている」、「ウクライナ政府に虐げられ、ジェノサイドにさらされてきた人々を保護する」、「ウクライナの非軍事化と非ナチ化を進めなければならない」というのです。

停戦交渉に見られる双方の要求

ロシア側が要求しているのは、「ウクライナの非軍事化」、「クリミア半島におけるロシアの主権」、「東部の独立」です。「非軍事化」は、ウクライナの NATO 加盟を阻止して中立化するということで、それを文書で確定することを求めています。

ウクライナ側の要求は、「即時停戦」と「ロシア軍のウクライナからの撤退」です。

そして、現在までの合意点は、一般市民の退路の確保だけということになります。

この戦争を止める力学

この戦争はどのようにして止めることができるか。いろいろな意見があります。

<国際的圧力>

まずは国際的圧力です。アメリカ・NATO はウクライナへの武器・資金援助を強化しています。さらにロシアに対する経済制裁、これまでにない厳しい制裁を行っています。けれども、制裁に即効性はありません。経済制裁でこの戦争が止められるかというと、今までのところは止められていません。

<ロシア国内の動向>

次はロシア国内の動向です。しかし、戦争反対運動は非合法化され抑え込まれています。同時に、プーチン政権は「ウクライナ政府が東部ロシア系住民を圧迫している」と大キャンペーンをやっています。最近では、地方における「ウクライナ避難民受け入れキャンペーン」です。ウクライナ東部から避難してきた人たちに住居や仕事を提供するといった記事が新聞に頻繁に載り、市民の説得に当たっています。プーチン政権の支持率は下がっていません。これは世論調査のやり方にもよりますが、プーチン大統領の支持率は 70% 以上です。

<仲介できる第三者>

このような状況のもとでは、戦争による膨大な犠牲者と都市の破壊を止めるために、和平を仲介する第三者が必要でしょう。現在、残念ながら国連はうまく機能していません。和平の仲介をする国が必要です。本来なら平和憲法を掲げる日本がやるべきだとわれわれは言っているのですが、日本は動きません。仲介役

にふさわしい国としては、米欧にもロシアにも一定の距離をとっているトルコ、中国、インドが考えられます。ただ、現在までのところ具体的な動きを見せているのはトルコだけです。

注目される全ロシア将校連盟の反対声明

その中で気になるのは、先に紹介した全ロシア将校連盟の反対声明です。これは国防省や治安機関、情報機関の退役将校の組織ですが、現役と OB との関係ですから、軍や政権指導部に対する影響力はなくなはないと思います。これがロシア国内でどのような動きにつながっていくか、注視したいと思います。1 月の反対声明には、次のように書かれていました。

「ウクライナに対して軍事力を使うことは、(1)国家としてのロシアの存在が問題とされる。(2)ロシア人とウクライナ人を永遠の敵とする。(3)両国に多数の若者の死者を出し、両国の将来の人口に影響を与えるだけでなく、NATO の多くの軍人、軍事技術と衝突して、その同盟諸国もロシアに宣戦するであろう。ロシアは世界を相手に戦争することになりかねない。」

まさに現在の状況を言い当てています。一刻も早い停戦と、この戦争の終結を望むところです。

<質疑>

— ロシア軍事侵攻の背景に NATO の東方拡大があつて、ウクライナが憲法に NATO 加盟方針を書き込んだことがプーチン大統領をいたく刺激したと言われています。3 月 29 日の停戦交渉でウクライナが国際的な安全保障を条件に NATO 加盟を断念したと伝えられ、一定の妥協が成り立つかと見えたところでブチャの虐殺で交渉が進まなくなったということですが、その後の停戦交渉はどうなっているのでしょうか。

藤本 現状はブチャの事件で交渉が止まってしまっている状態です。ロシアは、ウクライナの NATO 加盟を阻止するのが戦争の目的だと言ってたんですけれども、途中からほとんど言わなくなったようです。それはウクライナ側もやっぱりこれは無理だと分かっている、おそらく交渉の中でまだ表に出て来ないけれど、条件が話し合われるのではないかと思います。

ただ、今は NATO 問題よりもむしろ東部の 2 共和国とクリミアですね。これをどう扱うかということで、東部の共和国については大統領同士で話し合う、クリミアについては 15 年間とりあえず留保、その後で交渉という話がウクライナから出ているという話までは伝わってきています。しかし、戦争は続いていますし、お互いに駆け引きしているところなので、まだまだ決まらないと思います。

それから、停戦交渉というのは、要するに戦争を途中で止めるという話なので、その時点までに占領した線が境界になる。だから、停戦交渉で結末が近づいてくると戦闘が逆に激しくなって陣地の獲り合いになると言われています。

講演録

ロシア研究者から見たロシアのウクライナ軍事侵攻

対立の中で語られる「民族」と「言語」

伊賀上 菜穂（中央大学総合政策学部教授）

私の専門は、ロシア史、ロシアの民俗学、文化人類学などです。最近シベリアやロシア極東、旧満州の方を研究していて、ウクライナからは遠のいていたのですが、ロシアを研究している者として今回の軍事侵攻に関連して報告させていただきます。プーチン大統領の発言の中に民族の話がよく出てきていますので、それに注目してお話いたします。

「ロシア人」「ウクライナ人」とはだれか？

ウクライナ戦争が始まってから、日本では「ロシア人が嫌い」とか「ウクライナ人が好き」とか、「ロシア人嫌い」とか「ロシア文化はだめだけれどウクライナ料理はいい」とか、そういう話がよく出てきています。これらの発言では、「ロシア人」と「ウクライナ人」はくっきりと区別されているわけですが、では「ロシア人」「ウクライナ人」とは具体的には誰を指しているのか。例えば「ロシア人」と言ったときに、それがロシア国民を指しているのか、あるいはロシア民族を指しているのか、あまり意識されていないと感じています。

ロシアもウクライナも多民族国家なので、国の領域と民族分布は一致しているわけではありません。ロシア語では、ロシア国民という場合は「ロシヤネ」という言い方をし、ロシア民族は「ルースキエ」という言う方をするのですが、そして、それもいつもははっきり区別されているという訳でもないのですけれど、日本では国民と民族の区別がされずに混同して使われることが多いのは確かだと思います。

ロシアとウクライナの民族構成（公式データ）

ロシア国内の民族構成 (2010 年、約 1 億 4300 万人)	ウクライナ国内の民族構成 (2001 年、約 4800 万人)
①ロシア人(民族) 80.9%	①ウクライナ人 77.8%
②タタール人 3.9%	②ロシア人 17.3%
③ウクライナ人 1.4%	(約 830 万人)
(約 200 万人)	③ベラルーシ人 0.6%

表は、ロシアとウクライナの民族構成です。ソ連時代からの習慣としてロシアでもウクライナでもそれぞれの民族帰属を訊く機会が多いのですが、そもそもロシア民族とウクライナ民族は結婚も多く、厳密に民族帰属を分けにくい状態があります。さらに、両者はお互いの国の中でも、それぞれ大きなグループを形成しています。国勢調査で回答される民族帰属というのは、必ずしも本人の民族意識を正確に表したものではなく、またデータも若干古いのですが、公式データから単純に計算しても、ロシア国民の中に約 200 万人(約 400 万人という数字もある)のウクライナ民族

がいて、ウクライナ国民の中には約 800 万人(約 1000 万人とも言われる)のロシア民族がいることになります。「ロシア人が嫌い」とか「ウクライナ人が好き」とか言う場合、その「ロシア人」にはウクライナに住むロシア系住民も含むのか、ロシア国内のウクライナ系住民はどうなるのか。そういった問題が出てくるわけです。

プーチン大統領演説の中の「民族」

こういう複雑な関係を知ったうえで、プーチン大統領が発表した論文「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」(2021 年 7 月 12 日)や、彼のテレビ演説の内容を見ると、プーチン大統領がウクライナ民族とロシア民族の歴史的關係に注目していることがよく分かります。この論文の中で、「ロシア人」と日本語に訳されている言葉は「ルースキエ」という言葉で、基本的にはロシア民族をあらわす単語です。論文の内容からも民族やその使用言語を強調していることが分かります。

プーチン論文の中では、ロシア人(ルースキエ＝民族)とウクライナ人、ベラルーシ人は「三位一体の民族」であって、一緒なのだという主張がなされています。そして、「ウクライナのロシア人(ルースキエ＝民族)は自らのルーツと祖先を否定し、ロシアを敵だと信じることを強要されている」、つまりウクライナにいるロシア民族が強制的な同化政策にさらされている、と訴えます。

論文の主張と戦争の現実のギャップ

こうした見方は両国関係でよく出てくるものではありませんが、言語の問題は、ウクライナがソ連解体前後から自らの国家語(公用語)をウクライナ語のみとしてロシア語を加えなかったことから、30 年間にわたってウクライナとロシアの間で対立の種となってきました。

しかし、戦争が起こった今となっては、このプーチン論文の内容に戸惑いを覚える方が多いと思います。なぜならそこに書いてあることと実際の結果に、大きな差があるからです。

プーチン大統領は、①「ロシア、ウクライナ、ベラルーシ人の一体性」から三民族の協力の必要性を説き、②「ウクライナのロシア人」の言語と文化の保護の必要性を訴えます。しかし結果は、①「三民族の一体性と協力関係＝友好」とは正反対の戦争と虐殺になってしまいました。そして、②「ウクライナのロシア人」が「親プーチン派」として完全にロシア側についているかのように言われていながら、ロシア軍の戦争犯罪の被害者としてテレビに映る人たちのかなりの部分も、ロシア語話者だ、ということ

す。

これは一体どういうことなのかを確認しながら、ウクライナとロシアの関係の複雑さをあらためて見ていきましょう。

「ロシア・ウクライナ・ベラルーシ民族の一体性」

前述のプーチン論文に戻しましょう。この論文の題名は「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」で、その内容はベラルーシ人を含めた三民族の一体性を強調するものでした。

論文の内容を手短にまとめると、三民族が一緒だということを言ったあとで、しかし、この大きなロシア(ルーシ)民族(＝三位一体民族)は、ソ連(レーニン)の民族政策によって 3 つの国に分けられてしまった、「ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人という 3 つの個別の民族として、国家レベルで固定された」と批判しています。次にロシアとウクライナの歴史の話が長々と続き、そのあとに両国は経済的に助け合っていくべきであるとして、ウクライナの EU、NATO 加盟の動きが批判されています。さらに純粋なウクライナ民族国家を作ろうとする動き(＝ウクライナ民族主義)を危険視し、ロシア語を国家語に加えないことを批判しています。最後にウクライナの真の主権はロシアとのパートナーシップによってのみ可能であると述べて、ウクライナのロシアからの離反をいさめるという形になっています。

帝政時代の公式見解としての「ルースキエ」

「三位一体民族」というのは変わった言い方ですけれども、こうした考え方自体はロシアでは昔から知られていました。これは 3 つの民族が「キエフ・ルーシ」という一つの国(正確には、キエフ大公国(9～13 世紀頃)を中心とする諸公国の集まり)を発祥とすることから、もともとはルーシ人(ルースキエ)という同じ民族なのだという考え方です。帝政ロシア末期の人口調査などでも、この大きな民族概念が使われていました。まず、「ルーシ人＝ルースキエ」という大きな分類があり、その下位分類として、現在のロシア人にあたる「大ロシア人」、現ウクライナ人の「小ロシア人」、現ベラルーシ人の「白ロシア人」という 3 つの集団が置かれていました。また、大ロシア人が話す大ロシア語(＝現在のロシア語)も、小ロシア語(ウクライナ語)もベラルーシ語も、みんなルーシ語の方言であるとされていました。このように言うと、三言語の位置づけは一見平等なのですが、大ロシア語はロシア帝国の公用語として特権的な地位に置かれていたのに対して、小ロシア語とベラルーシ語は公的な場での使用が制限・限定されるなど、力のある兄とそれに従う弟たちという関係だとみなされていました。

ソ連時代の「東スラヴ人」

ソ連時代になると、ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人は別々の民族ということになって、大枠のルーシ人(ルースキエ)に当たるものは「東スラヴ人」とか「東スラヴ諸民族」と呼ばれるようになっていきます。東スラヴ人というと結構中立的な言葉に聞こえますし、私もそう思っていたのですが、ある研究会で、東スラヴと西スラヴを分けることによって、そこに決定的な境界があることが強調されているのではないか、という指摘を受けました。決

定的な境界はポーランドとソ連邦の国境と一致していて、これにより、ウクライナ人、ベラルーシ人がポーランド人とは異なる民族であることが強調される、というのです。これは意外とソ連的というか 20 世紀的な国の在り方を反映しているようです。

ともあれ、ソ連時代になってもスターリンらソ連指導部がロシア民族のリーダー性を強調したことで、ロシア人はソ連の多くの諸民族の中の「長兄」、つまり一番上のお兄さんなんだぞという意識はありました。

ソ連解体後の正教＋ナショナリズム

ソ連解体後は 3 つの民族が歴史上初めて、別々の独立国の主要民族となるわけですが、ナショナリズムの高揚に加えて、ソ連解体後の「宗教復活」により、ロシア正教圏としての東スラヴ圏(＝ルーシの地)という、帝政時代に強かったイメージもまた復活します。

ソ連解体後のウクライナには、反ロシアだけではなくて親ロシア、その両方の立場があったわけですが、決定的な転機は 2014 年のマイダン革命で、この時ロシアによるクリミア併合とドンバス紛争を経験して、ウクライナの人々の心情は大きく反ロシアに傾いたといわれています。正教会内部の対立も激化して、2018 年にウクライナ正教会がロシア正教会から独立しました(正確には、1990 年から存続するウクライナ正教会・キエフ総主教庁が、東方正教会で首位の格式を持つコンスタンティノープル総主教庁によって、ロシア正教会から独立したものと認められ、もう一つのウクライナ独立正教会も加わって、新生独立教会「ウクライナ正教会」が生まれたことを指す)。同年には、ロシア語などを地域公用語として使用することを認める法律がウクライナ憲法に違反しているとして廃止されるなど、ロシア語話者に厳しい決定も続き、お兄さん気分のプーチン・ロシアの側から見ると、弟ウクライナは裏切り者の離反者でしかないというふうになっていくわけですね。ウクライナのゼレンスキー大統領がプーチン論文を読んで、旧約聖書の中の兄による弟殺しの挿話、「カインとアベルの関係を思わせる」と言ったといいますが、その気持ちはよくわかります。

三位一体民族の思想は帝政時代からつづく兄による弟支配(なぜ姉・妹じゃないのかという問題はちょっと横に置くとして)の思想であり、プーチン大統領がこのような時代錯誤的ともいえる論文を発表した段階で、ロシアとウクライナの関係は相当危険だったのだなということを、今になって私たちは気づかされています。

「ウクライナのロシア人」について

プーチン論文はウクライナのロシア人について、「彼らを強制的な同化政策から守らねばならない」と主張しています。これは軍事侵攻直前の 2 月 21 日のテレビ演説でも繰り返されました。プーチン大統領は次のように言います。「非ロシア化と強制的な同化政策が続けられている……自分のことをロシア人(ルースキエ)だと考え、自分のアイデンティティ、言語、文化を守っていきたくて考えている人々は、ウクライナでは自分たちはよそ者だ

ということを思い知らされたのだ。」

一方、先ほど藤本先生が紹介された全ロシア将校連盟(イワシヨフ退役陸軍大将)の反対声明にも、ウクライナとロシア人についての言及があります。「もし戦場というものが生じれば、ロシア軍は、多くのロシアの若者(ルースキエ・レビャータ)を含むウクライナの軍人とだけでなく、.....NATO の多くの国の軍人や武器とも衝突することになる.....。」

ここでは、ウクライナ軍の中にはロシア人の若者も入っていると言っているのです。

プーチンもイワシヨフもどちらもルースキエという民族を表す語を使っているのですが、厳密には公的な意味での民族というよりも、もう少し広い意味で使われていると感じます。

ウクライナにおけるロシア語話者

ウクライナではウクライナ語のみが国家語とされており、ロシア語の公的機関での使用は制限されていますが、にもかかわらずウクライナにおけるロシア語の使用率が高いことは有名です。2001 年の国勢調査では、民族を「ウクライナ人」と回答したのは 78%で、ウクライナ語を「母語」と回答した人は 67.5%でした。民族を「ロシア人」と回答した人は 17%で、ロシア語を「母語」と回答した人は 29.6%でした。つまり、民族帰属の割合と使用言語の割合がずれているのです。言い換えると、自分をウクライナ民族だと回答している人は 78%もいるのに、ウクライナ語を母語として回答した人は、それより 10%強少ないのです。

※木裕子さんの博士論文『ウクライナにおける「リードナ・モーヴァ」概念とその解釈』によれば、ウクライナにおける「母語(リードナ・モーヴァ)」概念には揺れがあり、「母語」を本人の第一言語の意味ではなく、民族語(帰属している民族の言語)の意味で答える傾向がソ連時代からあるそうです。それを考慮に入れると、ウクライナ民族と答えた人の中で、実際にロシア語を使っている人の割合は、国勢調査内の数値よりもさらに高いと思われます。また、ウクライナ語とロシア語の混成語である、有名な「スールジク」というものも、話されています。

ウクライナにおけるロシア語使用率の高さの要因

もともとロシア語とウクライナ語は国境線でガラッと変わるものではなくて、緩やかにつながっていたのですが、ウクライナにおけるロシア語使用率の高さにはやはり様々な人的要因があります。それは、

- ①帝政ロシアによるウクライナ語の使用制限令、
 - ②ソ連時代も続いたロシア語優位政策、
 - ③ロシア系およびその他の移住者の流入(クリミア、ノヴォロシアなど、もともとスラヴ系住民の少なかった地域へは、ロシア人、ウクライナ人ともに入植した)、
 - ④ソ連時代の政策によるウクライナ人の人口減(他地域への強制移住、スターリン時代の大飢饉)、
- といったものです。ウクライナではスターリン時代の大飢饉がウクライナ人口を大きく減らしたことが、非常に強調されています。

「ロシア語話者」に含まれ得る人々の多様性

このように、理由はいろいろあるのですが、ウクライナのロシア語話者の中には多様な人々が含まれています。

その第 1 はロシア国籍者です。特に近年、プーチン政権がドネツクとルハンシスクの人民共和国、クリミア共和国の住民にロシア国籍を付与したことから、この人数は増えていると思われます。ただしロシア国籍者がロシア民族とは限りません。

第 2 はロシア民族。これは自分の民族帰属がロシア民族だと思っている人ですね。ただしこういう人も両親ともロシア民族とは限りません。

第 3 は諸言語の中でロシア語が一番うまく話せる人です。これはウクライナ系やその他の非ロシア民族も含まれます。ゼレンスキー大統領はユダヤ系ですけれども、第一言語はロシア語で、ウクライナ語はあとからは学んで習得したと聞いています。

第 4 にロシア語に近い言語を話す人。彼ら自身はロシア語を話しているという意識はあまりないかもしれないけれど、周りから聞くとロシア語に近いなという言語ですね。

ロシア語話者が「親ロシア派」「プーチン派」とは限らない

重要なことは、ロシア語話者は必ずしも「親ロシア派」「親プーチン派」とは限らないということです。

最近よくマスコミで「ロシア系住民」という言葉を聞きますが、これはかなり大雑把な言葉で、その内容がはっきり分らないところがありますが、とりあえずロシア民族またはロシア語を第一言語とする人たちを指していると考えれば、そういうカテゴリーの人が多いウクライナ東部の戦争で、ロシア系住民に大きな被害が出たというのは容易に想像できます。ウクライナ軍の兵士や武器を取った一般市民の中にも、このカテゴリーの人たちが相当数いたことは想像できます。

先に見たように、2 月 21 日のテレビ演説でプーチン大統領はウクライナにおけるロシア語話者の保護を訴えましたが、戦闘が起きているウクライナ東部では、プーチン・ロシアの明らかな協力者でなければ、ロシア語話者だからといってロシア軍が彼らを守るわけではない。多くのロシア語話者あるいは「ロシア系住民」が、ウクライナ軍とともに行動したり、ロシア軍の侵攻で被害にあったりしているというのが、実際の状況なのだと思います。

ロシア・ウクライナ戦争の影響

ロシア以外の国に住むロシア語話者にとって、ロシア・ウクライナ戦争の影響は今後どういうふうに出てくるでしょうか。

1990 年代にはソ連解体に伴ってそれぞれの共和国が独立していったわけですが、ロシアと何らかの接点を持つ人たち(ロシア人、ロシア語話者)を内部に抱えるということが、各国の安全保障上危険視された時代がありました。バルト三国では現地語を話せない人々への国籍付与を制限するなど、様々な問題が起きました。ロシア系の人々が大量にロシアへ引き上げた地域もありました。

現在の戦争が今後早期に終了したとしても、その影響はやはり旧ソ連地域に住むロシア人・ロシア語話者たちに暗い影を投

げかけると思います。今後そのような人たちがこの戦争でどういう思いをするのかということにも、私たちは気を配っていく必要があると感じております。

<質疑>

——「ロシアが長兄でウクライナ・ベラルーシが弟で、兄貴が弟をいじめている」という構図はマスコミでも言われていますが、ロシア人がそういう形で意識しているのかちょっと疑問です。ロシア語の兄弟＝ブラートというのは兄と弟の区別はなくて、特に長兄と下の弟という意識がすごくあると思えない。もちろん、スラヴ民族の中でロシア民族が一番偉いというのは絶対思っていると思います。スターリンはソ連を構成する全ての民族の中でロシア民族がリーダーだと言っていた。だけど、ロシア・ウクライナ・ベラルーシを比べてこの 3 つの中で「ロシアが兄だ」みたいな言い方をしていたのでしょうか？

伊賀上 ブラチヤ(兄弟)というのは確かに言っているのですが、私もカインとアベルに少し引きずられたかもしれません。もう少し調べてみます。ただ、「ロシア人のほうが偉い」という意識があるのは確かだと思います。(伊賀上—ロシア人をソ連諸民族のリーダーだと明言することは独ソ戦時から増加し、実際に「長兄(スタールシー・ブラート)」という表現が使用されることもあったことを確認した。そして現在、ロシアのネット空間では、ロシア人を兄、ウクライナ人、ベラルーシ人を弟とする言説が増加している。帝政時代にもロシア人を他の 2 集団より上に見るのは一般的であったが、その関係性を「長兄」「弟」と表現することがあったかどうかは今回確認できなかったため、今後の課題としたい。)

——ソ連解体後、ロシア正教圏での帝国ロシアの復活といった話がよく出ますが、その中でウクライナ正教会とロシア正教会の対立もあったということですけども、宗教とロシアのナショナリズムをリンクさせるような動きというのは、具体的にどういう形で表れているのでしょうか。

伊賀上 今回の戦争で言いますと、モスクワのキリル総主教がプーチン支持の発言をしたということです。日本のハリストス正教会は、「私たちは戦争に反対します」とはっきり言いましたけれども、正教徒の中にはモスクワ総主教庁も反対声明を出すことを期待していた人が多かったのではないかと思います。しかしモスクワ総主教庁は、そのようには行動しませんでした。

ソ連解体後のロシアでは、エリツィン時代から大統領や各地域の政治家たちが、ロシア正教会や各地の有力な宗教(イスラームやチベット仏教など)との親密な関係をテレビなどで国民にアピールするということが続いてきました。プーチン時代になってからは政治家と宗教指導者たちの関係がさらに密になっており、実際かなりの資金援助も行われているのだらうと思います。モスクワ総主教庁が戦争に反対しなかったことは、ロシアの軍事

侵攻に対して本当に大きなお墨付きを与えてしまいました。

ルーシ世界は正教圏であり、その正教圏を守るんだ、あるいは正教圏を取り戻すんだという考え方はかなり古い時代からありまして、ポーランド史研究者の福嶋千穂さんも書いていますが、ロマノフ朝が成立した 17 世紀以降にウクライナをポーランドとロシアが獲り合っていくわけです。そしてそれは最終的にポーランド分割につながるのですが、その中で「ルーシの地の回復」、「正教徒の保護」というスローガンが、ロシアの膨張主義を後押ししていったのだそうです。

——ウクライナ人の民族意識というのはどのように形成されていたのでしょうか。帝政ロシアの下では単にロシアの一地方だったのが、ソ連になってウクライナが一つの共和国になったことで民族意識が芽生えてきて、ソ連崩壊後独立して民族意識が強くなったというふうに聞いたのですが、そうなのでしょうか？

伊賀上 ウクライナ人の民族意識については私も詳しく知りませんが、ウクライナ人の中でもかなりの地域差があったのだらうと思います。西のガリツィア地方はかつてオーストリア・ハプスブルク家の支配地域で、独立運動もやっていたということで非常に民族意識が強く、これに対して東の方はロシアとの国境というか境界を感じずにいた人達なので、民族意識もそれほど強くありませんでした。

知識人の中には帝政時代からウクライナ民族意識が非常に高かった人もいれば、逆にロシア帝国の中で自分の生きる道を見出していた人たちもいて、そういう人たちはむしろロシア人(ルースキエ)であろうとした人も多いのです。ちなみにロシアに移住したウクライナ人たちの中には、強制移住だけではなくて自由移民もかなり多く、帝政時代の極東ロシアにもウクライナからの自由移民が多く入植しています。しかし極東ロシアのウクライナ移民はかなり早い段階でウクライナ人意識を失っていく傾向があった、ロシア民族(当時は大ロシア人)にすぐ同化していく傾向があったということも言われていて、民族意識については地域差や時代差、それから階級差などの違いが大きかったということが言えます(それでも、ベラルーシ人と比べるとウクライナの方が民族意識は強かったと言われています)。

ただし、最近の変化については、2014 年以降にウクライナ民族意識の急激な高まりが見られるということです。これは実際に現地に行っているいろいろ調べてみないと分からないなと感じています。

* 今回講義内容を掲載するにあたり、講義当日の発表および配布したハンドアウト内の誤記等を訂正しました(伊賀上)。

木のぬくもりと 暖炉のような温かさ

ロシア料理レストラン“ペーチカ” ПЕЧКА

前田 奉司(まえだ・としじ)

緑豊かな東京都府中市に、ロシアレストランペーチカを開店して3年がたった。「ペーチカ」は、ロシア語で「暖炉」。あたたかい暖炉のまわりに人が集うように、この店に人が集まってほしいと願ってつけた店名だ。

開店1年でコロナ禍の影響をまろに受け、とても苦労したが、なんとか府中のロシア料理店として認められるところまで来たと思っている。それがここへきて、ウクライナ問題である。ウクライナ問題が発生してからは、他のロシア関係の店では、心無い嫌がらせも多かったようだ。幸い当店は、心ないネットの書き込みが少しと、おかしい電話が数回あったが、むしろ馴染みのお客様、数多くの友人・知人から心のこもった有難い励ましを受け、従業員一同、それらの励ましに報いるよう、日々サービスに努めている。

今回寄稿の機会をいただき、あらためて、この店にかける想いについて、書かせていただきたい。

店のイメージは「シベリアの森の中のログハウス」

日本にあるロシア料理店の多くは、高級レストラン風の重厚な内装で、それもロシア料理の敷居を高くしている一因ではないだろうか。ロシアレストランペーチカは、明るい照明と木のぬもりを大事にした。私が以前ロシアで訪れた、シベリアの奥深い森の中にあるログハウスのようなレストランをイメージして作りあげた空間である。喧騒な普段の生活から少し離れて、ホッと一息つけるような空間を目指した。内装インテリアには、バイカル湖畔のイルクーソクから輸入した赤松をふんだんに使用した。開店当初は木の香りのよさに驚かれるほどであったが、今はそれも落ち着いた。今後は木の色が経年とともに変化していくのも、一つの楽しみである。

料理を待つ間、壁面の絵画やロシアに関する書籍、写真、雑貨などもお楽しみいただけることと思う。

ロシア駐在 24 年のビジネスマンが、なぜレストランか？

私、前田は、1968年に初めてロシアに駐在した。それ以来、モスクワに3回、延べ12年間の駐在を経験。その後も、ソ連崩壊後のウラジオストクに住友商事の極東ロシア駐在代表として5年間、ソ連崩壊後のロシア人ビジネスマンの教育の為に外務省がロシア各地に設立した日本センターのハバロフスク日本センター所長として7年間、トータルで延べ24年間にわたり、ロシア各地に駐在した。神戸市外国語大学でロ



シア語を学んだ後、駐在以外でも、旧ソ連時代を含め、50年以上の間、ロシアの人たちと交流してきたことになる。

その間、常にロシア現地、特に極東ロシアの人々の日本に対する熱い思いに触れてきた。彼らが日本人である私を非常にあたたかく受け入れてくれたことに感激した経験が多々ある。しかし、残念ながら、日本人一般のロシアやロシア人に対する認識は極めて薄く、ネガティブな印象が抜けきれていない。私はそのことを、長年とても残念に思っていた。そこで、日本人とロシア人が互いを正しく理解し合うための交流の場として、このレストランを開店したのである。

ロシア人が客をもてなす時はいつも、心のこもった料理を、沢山、本当に食べ切れないくらい次々出してくれる。私自身も、かねてから「食文化」に関心がある。ロシア駐在中に自分で天ぷらや焼肉を作って仲間に分りまったり、勤めていた事務所の食堂をロシア人シェフと共にリードしたりといった経験から、食を共にすることは、人と人との垣根を取り払うものだという実感を持っている。垣根が取り払われた状態でのコミュニケーションは、心の深いところでのつながりを生み、その後の人間関係をも円滑にしてくれると、私は確信している。

音楽をはじめとする、様々な文化交流も、食事と同様、人をつなぐものだろう。この店は先日開店3周年を迎えたが、その間、日ロの枠を超えた文化交流の場として、絵画の展示やライブペイントショー、リサイタルなど、数々の文化交流的イベントを開催し、いずれも好評を得た。新たな人との出会いが、また新たな人へつながっていくということもあった。

食と文化を媒体として、この店が、そうした人間同士のつながりの生まれる場所になってほしいというのが、私の願いなのである。

本場ロシアの味を再現するこだわりのメニュー

開店後約1年間は、日本でのレストラン経験豊富なロシア人のシェフ夫妻に手ほどきを受け、「日本にある材料で本場のロシア料理を作る」という彼らのスタイルを伝授してもらった。

当店こだわりのロシアンティーもその一例である。「ジャムを食べてから紅茶を飲む」というのがロシアの本式のようなのであるが、砂糖たっぷりのロシアのジャムに比べて、日本に

あるジャムは甘さが足りない。また、果実も違うので、ロシアで味わうような味は望めない。そこで当店では、絶妙なバランスで作られた特製ソースを紅茶に混ぜた状態で提供している。体も心も元気になるような、豊かな香りと優しくさっぱりした甘さ、そして鮮やかなピンク色。五感を駆使して味わっていただきたい。



その他のメニューについても、ロシア人のお客様から「これはロシアより美味しい」「お母さんの味がする」との有難い言葉を頂戴することもあるが、ロシアの味を伝えるという点以外にも、工夫を凝らしている。例えば、本場の黒パンはレストランによっては、非常に硬くて酸っぱく、なかなか日本人には受け入れられにくい。また材料も手に入れるのはなかなか難しい。しかし、黒パンはロシア料理には必ず添えられる一品である。だからこそ誰にでも受け入れられるものでなければならない。そこで、材料の配合や焼き方など、研究を重ね、日本人にもロシア人にも美味しいと思ってもらえる黒パンを実現している。

ロシア料理といえば、ビーツを使った真っ赤なスープ、ボルシチを真っ先に思い浮かべる方が多いだろう。初めてロシア料理を口にした方が、「見た目から想像した味と違い、驚くほど、あっさりしていて優しい味」との感想をいただいている。余分な油を使わず、鶏肉のさっぱりしたスープと、野菜のコクが、何度でも食べたくなる味の秘訣だ。食べる輸血といわれるほど栄養価の高いビーツたっぷりで、そのおかげか、仕事の後ボルシチを食べている店のスタッフも、コロナ禍においてもみな元気である。

チキンストロガノフもちょっと珍しいメニューだろうか。国産牛をつかった濃厚なビーフストロガノフはもちろんおすすめメニューであるが、ささみで作るチキンストロガノフは、あっさりしていながら、コクのあるソースで満足感もある。ストロガノフに添えられるそばの実も、体に良く、ロシア人は白飯の代わりによく食べる。香ばしい味のそばの実は、彼らには無くてはならぬ大好物の一つである。

料理を食べながら、料理の歴史やロシアの生活を紹介したいと私は思っている。長年ロシアで生活してきた私だからこそ知っている、教科書には載っていないような、生活に密着した話を、折に触れお客様にお話しさせていただいている。

料理に関する話でいえば、ペリメニ（ロシア風水餃子）の話が面白い。ロシアの冬は寒く長いので、住宅の窓ガラスが二重になっていて、生の餃子を窓ガラスの間や、窓の外で凍らせて保存が出来る。そして、それを食べるときには熱いスープを準備し、それに凍らせたペリメニを入れて温めて食していた——など。

お酒の好きな人には、ロシアのお酒の飲み方も知ってもらいたい。ロシアでは、まず熱いスープと肉などでおなかを満たしたうえで、出席者の健康や仕事の成功を祈ってウォッカを一斉に一気に飲み干す。ワイン発祥地と言われるジョージアのワインも味わってほしい。美味しい料理に美味しいお酒。豊かなロシアの食文化を楽しんでもらえたら、嬉しく思う。

これからの展望

コロナの状況も鑑みて、今後は様々なイベントも徐々に再開しようとしている。ギターの師匠と一緒に、ロシア民謡を歌う「ペーチカナイト」を定期的で開催してきたが、コロナ禍はディナー営業もなかなか厳しく、さらに歌のイベントは開催が難しく、残念であった。

少しずつ制限が解除されていく中で、先日「ロシア民謡のタベ」を企画し、私は民族衣装を着てロシア民謡を披露した。私どもの年代にとっては、ロシア民謡はどれも懐かしい音楽である。私はそれをロシア語で披露している。ロシア語の歌の意味など、僭越ながら少し解説もさせていただくと、喜んでいただいているようだ。言葉はわからないかもしれないが、ロシア語の響きの美しさも楽しんでいただきたいのである。

そして、近々、オペラ歌手天野加代子さんのディナーショーを開催する予定である。天野さんはモスクワ音楽院で修業し、ロシア各地のコンサートに出演して、艶やかな和服姿で美しいソプラノの声を響かせ聴衆を魅了している。ドイツ在住のロシア人オペラ歌手アレクセイ・コサレフ氏と、ロシア人ピアニスト、ユーリー・コジェバートフ氏との共演で、大変楽しみである。時節柄、客席を各回定員10名として、ゆったりとした空間で食事と音楽を楽しんでいただけるように企画している。至近距離でオペラ歌手の歌を聴く、このような機会は、そう多くはないだろう。ぜひ、ロシア料理と一緒に楽しんでいただけたらと思う。

皆様にも是非一度足をお運びいただきたい。精一杯おもてなしさせていただきます。（投稿日：22年6月11日）

ロシアレストランペーチカ → <https://pechka-bcj.com/>



前田奉司さん／1966年神戸市外国語大学ロシア語学科卒業。住友商事モスクワ事務所次長、同極東ロシア駐在代表、ハバロフスク日本センター所長などを歴任。2019年5月レストラン「ペーチカ」を開業。

＊本記事は、関西日露交流史研究センター「白樺だより」より転載させていただきました。

JICでは、4月と6月にオンラインイベントを行いました。ロシアがウクライナに侵攻して戦争をしているときに、ロシア関係のイベントを行うことに迷いがなかったわけではありません。しかし、このような時だからこそ、ロシアを知らなければなりません。政治や軍事の話はもちろんですが、ロシアの人々がどんな生活をしているのか、相手を知ることから始めようということで、JICスタッフが知恵をしぼって企画しました。

新型コロナによる国際往来の中断に加えて、このウクライナ戦争で日ロの民間交流・文化交流は非常にやりにくい状態になっていますが、私たちはできる限りつながりを断ち切らないために、努力を続けたいと思います。(編集部)

JICオンラインイベントの報告

4月24日 弊社迷物スタッフ岡本プレゼンツ お菓子ルーレット～vol.1 ゆるいお菓子の話

JICでは、4月24日(日)、「お菓子ルーレット～vol.1 ゆるいお菓子の話」というオンラインイベントを開催しました。視聴してくださった方々はもちろんご存知ですが、これはロシア、東欧、ユーラシア地域で親しまれているお菓子について、弊社スタッフの岡本がただただ喋る...という、本当にゆるいイベントでした。

そもそもなぜこのイベントが誕生したのか。それは長引く新型コロナウイルスの影響や、今年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻の影響で、JICの活動が大幅に低迷していることが背景にあります。仲の良いスタッフと雑談しているときに「このままじゃだめだね...」という話になり、「この状況でも何かできることがあるはず」、「少しでも動かなきゃ!」.....「そうだ!知識の塊(というか、必要なことも必要でないことも、何でも知ってる)岡本を喋らせよう!」と、イベントの内容より先に『岡本ありき』で、しかも本人の同意も得ぬままイベントを開催することが決まったのでした。

弊社の岡本には、他スタッフを凌駕するほどの旧ソ連地域に関する広くて深い知識があります。そして話し好きで、ノリも良い!その豊富な知識と性格ゆえ、つついお客様との電話や接客が長引いてしまうこともしょっちゅうです。2017年に東京・吉祥寺で開催したイベントでもMCを務めたのですが、ぶっつけ本番とは思えないトークで会場を魅了した実績があり、イベントで講師(?)を務めるにはもってこいの人材なのです。こうしてMC岡本を筆頭に、カメラマン井上、ブレイン稲塚、岡本の暴走ストッパー五十嵐の4人でイベントチームが結成されました。

イベントの発案から開催日まで日数がなかったので準備を簡単にするため、内容は2017年のイベント時と同じ「お菓子」をテーマにしました。そのイベントで使用した写真に、各スタッフがそれぞれストックしていたお菓子の写真を追加



写真、(左)レーニンチョコ、(右)光太夫あられ

し、膨大な量の写真を準備。台本ありきでは面白くない!と、写真はルーレット形式での選択にし、表示されたものについて喋っていくことになったのですが、どの写真が表示されるかは実は私たちにもわからなかったため、写真によってはあまり話すことがなかったり、関連画像の表示に手間取ったりと、視聴者様にとってはイライラさせてしまう場面も多かったかもしれません。また、ネタとして仕込んでいた日本のお菓子が2つも登場してしまったことも、想定外の出来事でした。「シベリア」という羊羹(または小豆のあんこ)をカステラで挟んだパンと、「光太夫あられ」というエカテリーナ2世に謁見した大黒屋光太夫の名がついた米菓で、どちらもロシアに縁のあるお菓子ではあったのですが...

このイベントの副題に”vol.1”とついていることにお気づきでしょうか?

そうです、実はシリーズ化の構想があり、今後も続けていきたいとの思いがあります!オンラインイベントでは沿海州にある製菓会社の紹介が中途半端に終わってしまったため、その続きとなる動画を年内にはYouTubeの「JICチャンネル」にてアップする予定です。

最後になりますが、オンラインイベントをご視聴くださったみなさま、誠にありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。進行中の不手際のほかにも、内輪ノリが過ぎてしまった部分など反省すべき点が大いにありました。終了後のアンケートで寄せていただいたご意見も、次回に生かしていこうと思います。引き続き温かく見守っていただければ幸いです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

なお、お菓子ルーレットの動画は、YouTube「JICチャンネル」でご視聴いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=Z62SLwTpTNC>

(報告者; 岡本の暴走ストッパー・五十嵐)

『ロシアのチョコレート包み紙』 出版記念オンラインイベント 6月10日

奈良のロシア雑貨店「マールイミール」の店主・小我野明子さんの著書『ロシアのチョコレート包み紙〜ソ連時代のかawaiiデザイン』が販売されたのは今年の1月中旬のこと。昨年この本を作るための取材に協力した縁で、JIC もちよつとマニアックな分野ではありますが結構かawaiiこの本をTwitterやInstagramなどで応援してきました。

発売当初は新聞や雑誌でも取り上げられて、一部の書店ではこの本を含めた関連本やマトリョーシカなどロシア物品を集めた企画展も開催されていました。ところが、2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻で、雰囲気はガラリと変わってしまいま

した。「ロシアは悪」とばかりに、在日ロシア人への嫌がらせやSNS上での節操のないロシア批判など、ロシアと口に出すことさえはばかられる日々。当然

それまで行われていた企画展も終了し、デパートなどで毎年行われてきたロシア関係イベントは今に至るまで自粛を余儀なくされています。

そんな中でも小我野さんは、本の出版に協力してくれた友人たちへのお礼と今のロシアの状況を見るためにロシア行きを決意、この3月末にモスクワへ出かけられました。そこで渡航の際に「モスクワの様子をビデオに撮ってきてください。戦争が終わったらこのビデオを見せる場を作りたいですね」と依頼した次第です。小我野さんはたくさんの写真やビデオを撮ってきてくれたのですが、ウクライナ戦争は長期化し、いつ公開できるのかあての不着な日々が流れました。

4月24日にJIC若手スタッフによる『お菓子ルーレット〜ゆるいお菓子のはなし〜』というオンラインイベントが開催されました。お菓子を切り口にしたこのオンラインイベントには、思いのほかたくさんの参加者が集まり、アンケートにも「このような企画をこれからも是非続けてください」「ロシアの情報をぜひ知りたい」といった声が多く寄せられました。

そこで、「もうそろそろやってもいいんじゃない？」と企画



イベントの様子(左=小我野さん、右=報告者)

が再スタートし、6月10日の夕方からJIC大阪事務所を会場にオンラインイベントを開催する運びとなりました。

メルマガやSNSでの宣伝を行い、周知期間はそれほど長くなかったものの、当日は40名ほどの参加がありました。

小我野さんのお話は、出版されたばかりの『ロシアのチョコレート包み紙〜ソ連時代のかawaiiデザイン』の制作裏話と3月に訪れたモスクワの様子が中心で、撮ってきた写真とビデオを映しながらトークが進みました。

今年3月のモスクワ「赤の広場」周辺は、以前のような各国の観光客が集まって賑わい混雑した場所ではなく、ロシア人がゆっくりと散歩したり観光したりする落ち着いた場所になっていて、昔のロシアに戻ったようだったというお話、いつも小我野さんが仕入れをしているヴェルニサーシュの屋台はコロナ下で観光客相手のマトリョーシカショップが店を閉め、屋台の棚がガラガラに空いていたのに反して、「蚤の市」にはたくさんの中古品が持ち込まれ多くの市民で賑わっていたこと、モスクワ郊外・セルギエフポサードに住むマトリョーシカ作家の友人の家に招待されて、家庭料理をごちそうになり、そのお嬢さんと遊んだことなど、様々なお話を聞くことができました。

予定していた分のビデオとお話は早めに終わってしまったのですが、その後もロシア出入国の際の話や、撮ってきた写真の説明が続き、「ロシアが好きすぎて・・・」と熱く話し続ける様子に、小我野さんのパワフルな行動力を感じた方が多かったようです。

アンケートでも「モスクワ現地の最新状況を見られてよかった」「これからもロシアの生の様子を伝える企画を作ってください」など、温かい励ましの言葉をいただき、このような状況の中にあってもロシアに心を寄せ、関心を持っている方が多くいらっしゃることに勇気づけられました。

困難な時期は続きますが、JICでは今後も折にふれいろいろな企画を続けていきたいと思っています。応援、どうぞよろしくお願いいたします。

(報告者; JIC 大阪・小原)



第3回ロシア文学読書感想文コンクール

「私のトルストイ」

世界に名だたるロシア文学は、若者たちに生きていくための知恵と勇気を与えてきました。NPO 法人ヘラルドの会は日本の若者たちにもっとロシア文学を読んでほしいと考え、第 3 回ロシア文学読書感想文コンクールを開催いたします。

全国の中学生、高校生、大学生および 23 歳までの皆様のご応募をお待ちしています。

課題作品

感想文 ★中学生の部

レフ・トルストイ作『幼年時代』または『戦争と平和』

★高校生大学生を含む 23 歳までの青年の部

レフ・トルストイ作『戦争と平和』または『復活』

評論 ★高校生大学生を含む 23 歳までの青年の部

レフ・トルストイ作『戦争と平和』

応募期間：2022年8月12日～9月12日

表彰式：2022年12月 ※日程と会場は未定

主催：NPO 法人ヘラルドの会

協力：ロシア文化フェスティバル日本組織委員会

後援：ロシア連邦文化省／駐日ロシア連邦大使館

審査員（敬称略）

金沢美知子（審査委員長：日本トルストイ協会会長、東京大学名誉教授）、三浦正巳（日本トルストイ協会事務局長・理事）、木村敦夫（日本トルストイ協会理事、文芸評論家）、伊東一郎（早稲田大学名誉教授、ロシア文学者）、宮腰尊史（新潟放送取締役）、阿部昇吉（スラヴァ書房代表）、鈴木芳子（翻訳家、ドイツ文学者）

◆◆編集後記◆◆

▼ウクライナ戦争は長期戦の様相を濃くしています。東部・南部の戦闘はなかなか収まりそうにありません。停戦に向けた仲介を誰がやるのか。日本もアメリカも EU もロシア非難とウクライナ支援の言葉を繰り返すだけで、いまだこの戦争を止めるために实际的な行動をとろうとしていません。国連とトルコの仲介で黒海の穀物輸送路の再開が合意されたのが一つの光明です。▼本号は、ウクライナ戦争特集とし、3つの講演録を収録しました。いずれもこの戦争の経過や背景を知り、今後のロシア・ウクライナ関係、米ロ関係を考える上で有益な情報と視点を提供してくれます。▼2 年間以上続くコロナ禍は「第 7 波」の感染拡大が始まりました。欧米諸国や東南アジア諸国での「With コロナ」緩和策に歩調を合わせて、日本でも 6 月から水際策が大幅緩和され訪日観光客の受入再開が始まりましたが、まだまだ気を緩めるのは早いようです。▼ロシア・旧ソ連諸国を専門とする JIC にとっては、きわめて困難な状況が続いていますが、しかし、私たちはまだ諦めておりません。コロナに対しても、ウクライナ戦争に対しても白旗を上げる気はありません。戦時下の苦境にあるロシアとウクライナの友人たちを支援するとともに、私たち自身も生き残りをかけて、あらゆる努力を続けるつもりです。（F）

<発売中!> 小我野明子さんの本

ロシアのチョコレート包み紙

～ソ連時代のカワイイデザイン～

小我野明子さんの本が 1 月に出版されました。

青幻舎刊、A5 版 160 頁、定価：2200 円＋税

「ソ連時代につくられた多くのチョコレートの包み紙が、今日も生き残り、使用されています。そして、そのほとんどが「ソ連スタイル」パッケージの名品となりました。

ソ連時代の産業グラフィックは、これまで完全な意味では、芸術として認められてきませんでした。包み紙はほとんどの場合、一度きりの使い捨てとしてゴミになりました。しかし、コレクターはチョコレートラベルの芸術的、文化的価値を理解していたのです。…」(本書より)

注文は、青幻舎へ → info@seigensha.com